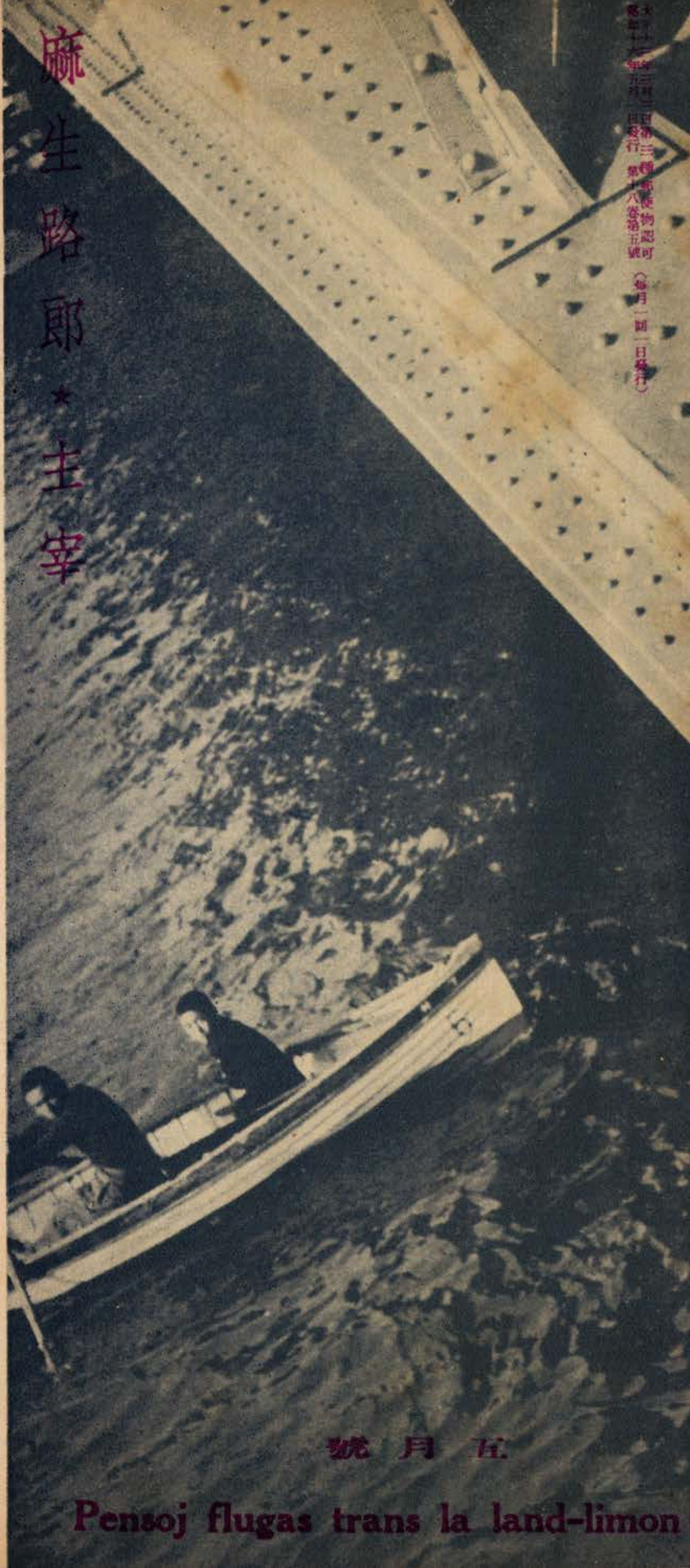
川柳の雑誌

麻生路郎★主宰



五月號

Pensoj flugas trans la land-limon

大正十一年三月二十日第三種郵便物認可 （毎月一回一日發行）
昭和十八年五月一日發行 第十八卷第五號

麻生路郎著

新川柳評釋

★定價 八十錢（送料）六錢 ★海外送文は送料實費加算を乞ふ

發行所 不朽洞

堺市出島海岸通二丁目一八二番地

振替大阪三〇三九二番

時代の要求する

絹服地★ス・フ生地★毛織物

事務服・ワイシヤツ

其の他 敷呂風・旗國

日東サービス株式會社

大阪市東區北濱二丁目★電話北濱(4)六六三六番

僕は思ふ

麻生路郎

大分、以前のことであるが武者小路實篤氏が新らしい村を宮崎縣の山奥につて同志をあつめたことがあつた。私は「白樺」時代の武者小路氏には非常に好感を持つてゐたし、武者小路氏の書かれるものは大變面白く拜見してゐたが、この新らしい村には全然共鳴出來なかつた。人道主義のトルストイが、無料宿泊所の人間に金錢を與へると、その金が無くなるまで働かうとしないことを發見して、彼等は遂に救ふべからざるものであることを悟つたやうに、武者小路氏のこの新しい村も要するに、華族のお坊ッちやんの机上計劃を實現化しやうとするのに過ぎないだらうと思つてゐたのである。果して、暫くすると、新らしい村は同志にまかせて自分は奈良へ來て住んでゐた。そして新らしい村は遂にどうなつたのか、世間からは忘れられてしまつた。その頃私は云つた。私だつたら、新らしい村を山の奥に建設しないで、むしろ大都會のド眞ン中に創りたいと云つた。即ち社會と四ツに取ッ組んだ新らしい村を創りたかつたのである。それは新らしい村と呼んでもいゝが、新らしいビルと名づける方がもつと適切であつたであらう。

私は武者小路氏の偉らいことも知つてゐるし、敬服もしてゐるが、俗惡な世間から逃避する態度は私のとらないところであつた。從つて芭蕉の偉大さも認容はするが、彼の隱遁的であり、逃避的であることには慊きたらないのである。

私は何處迄も俗世間の中にあつて、超脫俗的でありたいのである。私が川柳してゐるのはその境地への突擊を目指してゐるに外ならないのである。私の舊作の

子澤山僕の枕は何處へいた

文學し、川柳する惱みを持つのではないか。要するに川柳することによつて、現代化された良寛になることが、のぞましいが、それが出來なければ、せめて

ただたのめ花もはらはらあの通り

の一茶ぐらゐにはなつて貰ひたいものである。

川柳人協會は斯うした高度な川柳人をつくることを最終の目的として、川柳人の一人一人の魂が結びつきつゝあるのである。

でなければ、川柳が人間を陶冶する詩だなどとは云へないだらう。

摘草の道なき土堤に突きあたり　八歩　ラメカ　福井哲

不朽洞句抄

麻生路郎

もう妻のいふままにさす年になり
休閑地わたし蚯蚓が嫌ひです
休閑地けつきよく母の手がかかり
二合三勺それで足るのを淋しがり
飲むだけは飲む氣ビルでの頑張り屋
ぜんざいへ參加するほど父弱り
どうですと云はれ金語樓式笑ひ
重役もいゝが會社は葬式屋

川柳雜誌　五月號目次

表紙……(橋)……福井哲
僕は思ふ……麻生路郎…(一)
初對面……蛭子省二…(二七)
川柳合評 火の見櫓……五健・山雨樓・不水・風來子・九坡・久米雄…(二〇)
いろ〳〵……(三)
武玉川四篇研究(一八)……梅本塵山・森東魚・蛭子省二…(一〇)
隨想……小山文三…(二三)
言葉の散歩……(二)
鐵ペンの滴り……石崎柳石…(二三)
狸……(補追)……前田五健…(一五)
吟行地調べ 奈良篇(三)……麻生路郎…(一二)
二世の入營……路郎生…(二八)
掌篇 川柳 芋力……小畑自由朗…(八)
滿洲雜記……湯淺小城子…(一六)
藝道一代男批評……吉田水車…(二七)
川柳仁義……高鷲亞鈍…(二四)
役所の窓から……大森風來子…(二六)
★
不朽洞句抄……麻生路郎…(一)
近作柳樽……麻生路郎選…(一六)
川柳塔……麻生路郎選…(四)
同舟近詠……諸家…(八)
一路集 教科書……塚越正光選
共稼ぎ……長野文庫選…(二八)
各地柳壇……(三〇)
川・協ページ…(二八)……柳界展望…(三五)
後記…(三五)……社關係の人々…(三六)

言葉の散歩

本篇は丹路居での雜談から亞鍾氏が蒐錄されたものである。（編輯局）

○

僕は近頃毎朝家内より早く起きて、加賀の言葉を寫本してゐる。

ゆく〳〵は川柳の中にある方言、例へば石川縣の言葉のは入つたのに綠雨君の句があり、櫻川不水君の句には肥後訛りがあり、青森縣の句には東北地方の方言や訛りがあるので、全國各地の方言句集を出したいと思つて分類してゐる。（路郎）

○

段々純粹の大阪辯といふものが消えてゆくね。まあ吾々が現在大阪辯を知つてゐる生き殘りといつたところだらうと思ふ。その意味で後世のために大阪辯を研究し、書き記して置く必要がある。僕は先達ても天保十二年に出た、「新撰大阪詞大全」―原本は顯原退藏氏の所藏―を日本國語大系から寫本した。その他「風流俄選」にも大阪辯が相當にあるし、近松物の淨瑠璃や劇作、西鶴の諸作、現代の作家では藤澤恒夫の小說なども目を通しとく必要がある。（路郎）

○

此頃道を歩いてゐても、手帖に大阪辯を寫生してゐる。道端の會話、電車の中の話など無意識に出る大阪辯はとてもいゝ。その寫生にはその月日と時刻、場所、人物の年頃や職業、例へば髮結さん、大工さんなどと入れて置く必要がある。（路郎）

○

今では混亂してゐるけれど、僕らの子供の時は大阪言葉は船場と島之內、阿波座、上町、天王寺といつた工合にちよつとづつ違つてゐた。（路郎）

○

吾々の言葉の文脈が醱酵的になつて來たといふことはつまり外國の言葉の文脈になつて來たんだね。（路郎）

鳥取縣に東京と似たアクセントがある。（某人）

江戸つ兒辯が西と東にあるのは、その途中で消えてしまう。さういつた地層のやうな層があるわけだ。日本の兩端に昔の言葉が殘つてゐて、沖繩縣では鎌倉時代の參候などを今でも使つてゐるそうだが、それなんか結果として言へる。（路郎）

○

九州の言葉は平家が落ちていつたので、その言葉が殘つてゐる。（鋭々）

人が言へば大阪のアクセントになります。放送局のアナンスでもさうであります。（某人）

○

大阪の放送局の奴がアめ（雨）と使ひますが、あれはむかつきます。大阪辯であメとメの方に力を入れた方がよろしいな。アめとアにアクセントがは入ると雨が降つたやうな氣がしまへん。（孤蓬）

○

言葉は圓のやうに擴がるものだね。大阪は京都から擴がつてきた圓になる。その圓が周圍に擴がつてゆくとぼやけてしまふんだね。（路郎）

鹿兒島の言葉はわかりませんね。おやんぼといふのは串さし饅頭ですが、二本棒が侍だから言つたものでせうが、りやんぼまでならわかるが。（孤蓬）

○

近頃の小學校の教科書を讀むのにアクセントまで教へてゐますね。（鋭々）

しかし安心なもので、子供は家へ歸ればあメといつてゐる。（孤蓬）

やがて、さういふ事で教育してゆくとなれば、何れは同音で違つたものを統一してしまふでせう。（鋭々）

統一するなら大阪辯でね……（孤蓬）

○

伊丹の古い名物の餅にアンビンといふのがあります。アンは餡のことですがビンは餅で支那語の發音です。（丹路）

○

京都では雨があがるといひます。明るといふ意味で古語かと思ひます。（孤蓬）

雨があがるの大阪言葉が本當のやうだ。雨が上るだからね。雨が降つても明るい時もあるから。雨があかるは古語でなしに

あがるの變化だらう。（鋭々）

○

遊女でも言葉の變化で百四十幾つある。（路郎）

○

それで面白い話がある。長崎の人から、よもやちりめんが名物だと聞いてゐたので、長崎へ旅行した時、呉服屋といふ呉服屋を訪ねて、女房の土産にと思つて、よもや縮緬ありませんかと訊いても、そんなものは無いと言ふ。あとで判つた話だが、高等淫賣の事で、よもや、縮緬など被てゐる女が、といふ意味の語原ですね。（某人）

★前山北海氏曰く

「二等後家」は布哇特有の言葉でありまして、假令ば綿元伯樂氏の如く奥さんが日本訪問に行つた場合、留守中の伯樂氏を二等後家と稱して、さぞ淋しからうと同情する場合の稱呼であります。伯樂氏は先日奥さんが歸布されたので二等後家は解消となり今度は二等後家の悲哀を詠ふ替りに朗らかな作句を示される事と思ひます。

★麻生路郎曰く

和歌山縣下ではアメリカ後家といふのがあります。これは移民してゐる人達の留守宅で孤閨を守る妻女への稱呼です。

★お米の割當

大阪府ではお米の通帳制開始で四月一日から一日一人の割當量が次のやうに決つた。數へ年一歳から五歳が約〇・八四合、六歳から十歳が一・四〇合、十一歳から六十歳が二・三一合である。

★たばこと空箱

四月一日から大阪地方專賣局管内の大阪、京都、兵庫、和歌山、奈良の各府縣の煙草屋さん二萬四千軒がいつせいに煙草は空箱と引換へ賣りをすることになつた。

○

夕鐘君が大阪へ丁稚に來た時こないから（二合五勺）が判らなんだそうだ。（路郎）

○

一錢がんおくれのがんは大阪の訛りで一錢がほどといふ意か。（路郎）

○

犬を呼ぶのに Come on はカメン。ticket はテケツでよい。（孤蓬）

オスター・サンドウキッチ（某人）

カツ・サン（丹路）

デパートは間違ひ、デパートが本當。（孤蓬）

○

句にする場合、手二本を手エ一二本、車庫を車庫オーとして一音餘計に讀む人がある。大阪の訛りだが、これはいけない。（路郎）

○

よろがはのみる（淀川の水）は河内天滿の訛り。（鋭々）

○

日本語は六ケ敷いね。英語のIでも、私、俺、僕、等々々とある。（孤蓬）

○

Iと大文字を書くのは英語に限つてゐる。世界中で英國ほど尊大で、傲慢な國はないと言ひますね。ドイツ語でもフランス語でもIは皆小文字です。（孤蓬）

○

貴樣とか、御前とかは決して悪い言葉ぢやないのに見下げた言葉になつてゐる。（丹路）

それはだん〳〵下落したんだよ。（路郎）

○

赤は赤色、綠は綠色、青は青色といふだけだが、黄だけは、黄色い色といひますね。（某人）

○

支那の宮廷では黄色を皇帝色としてゐるので、民間では黄色を使つたら不可いことになつてゐる。（路郎）

○

朝鮮の屋根はグリーンでなければいかん。（孤蓬）

○

斷じてとか、全然、とかいふ言葉が、反對に使はれてゐますね。斷じてよろしい。とか、全然、よろしいとか。（鋭々）

○

いげつないが本當か。えげつないが本當か。（亜鈍）

いげつないです。（かほる）

一般に、えげつないと云つてゐるが、島の内あたりでは、いげつないと云つてるかな。（路郎）

川柳塔

═路郎選═

麻生葭乃

見かへれば壺に菜種の春が來た
手をのべた袖の下にもつくつくし
ボーチに脫ぎし靴は統制品ならず
ジヤー失敬といふ眼吊革持つ少女

米本貴志子（唐下、高石）

緣談へフト網渡り目に浮び
硯、墨、手本揃へてあるばかり
女中部屋覗けばみんな据りかへ
だまつてる友がほしいと思ふ今日

橋本綠雨（大阪）

雪の諏訪温泉にて靜養

店番が炬燵から出る諏訪の街
節米に晝は信濃のそばと決め
混浴に男は少しゆづるなり

親不知

荒天に旅をつゞける親不知

七十八才の母

訪れば足袋を繕ふ母なりき

福田山雨樓（播磨）

子の頭張つても愛の深みゆく
胃を病んで文士仲間とひやかされ
東京の表情にある三太夫
しもたやの格子の中の指壓法

奥村丹路（兵庫縣）

名刺出すほどの僕ではないけれど
何となく輕いひゞきの會社員
人妻の時計は帶の合間より
つまらない用事乘換二へんして
昔々てん〳〵手毬の數へ唄
洋室の時計は止つてゐるものか

岩崎柳路（張家口）

奉公日せめて靴でも磨こうか
隣組お向ひさんも共稼ぎ
長煙管明治產れの母の顏

寺井銳々（兵庫縣）

警戒をしつゝ女の凭れより
少女二人行けば郊外もう春よ
赤ん坊いつかスキッチまでも知り
滿員車盛裝むしろ哀れ也

高澤一浪（ハワイ）

もうのまんことに極めやうかと思ひ

行末を誓へ〳〵と責められゝ
そんな首などとアイスはアイスなり
インテリの意味を二世の妓に問はれ
兄弟が力合せて損つゞき
何の守様とか先祖申したり

戸倉普天（兵庫、川西）

豫算案通つて大臣引籠り
先輩に頼みに行けば風邪と云ふ
長旅に檢溫器まで入れて居る
母一人子一人それで子の弱く
外米に慣れスフに慣れ足るを知り

北海道定山溪温泉にて

雪を掘る事も官舍の子が覺え

小畑自由朗（温知山）

獨伊の手マツオカサンをしびれさせ
これ見よとアメリカ弗をぢやらつかせ

★

逸見灯竿（岡山）

座布團が汚れ汚れて子が太り
忙しさ隣組長髭が伸び
滿一才障子に穴をあける趣味

國民學校（二句）

又しても小學校と書き損ね
國民學校校長神經質になり

西川青美（天阪）

黒マント着れぬ嘆きを抱いてやり
浪人の感傷親は倍も受け

夷一笑（天阪）

空地利用あれ〳〵みんなとうがたち
花吹雪もつたひなくも川へ散り
節米をしても立派な男性美
子をだいて春の光の中へ出る
摘草は代用食にあらざりき

水谷鮎美（兵庫）

次男竹善入院（三月三十日）

入院を手傳ふように陽があたり
入院の子の瞳に金魚・亀・小鳥
子のことで看護婦さんと立話

吉田水車（奉天）

トランクの重さ滿洲廣すぎて
内地からの人ととし聞けば米のこと

丹羽のぼる氏御母堂の逝去を悼む

今日からは佳吟の賞め手一人減り
一列勵行急きも慌てもせぬ姿

須崎豆秋（天阪）

ワンワンよ氣の毒ながら米が無い
ありがたく二本を啞になつて呑み

戰陣訓（三句）

空の花よしや屍を曝すとも
戰陣の訓へに馬も斥りぞかず
翻譯の利かぬ戰陣訓なるぞ

宮岡白峯（静下、柏原）

伊勢參拜、歸還一周年

生還と云ふ掌を叩いとき

名古屋にて

名古屋城子供は科學してゐたり

東山公園にて

迷ひ子の様にキリンも歩いてゐ

石曾根民郎（松本）

ガラス戸の灯に働けり拒まんや

子に及びみな鼻柱揃へ聴く

野戰へ征くひとの國旗にしるす

日の丸へ故國の風はたゆまざる

正本水客（大阪）

につぽんのぜいたくにさくらふみゆく

幕切の肩へさくらの遖らはず

海の散歩女中にみかんおごられる

黒川紫香（豊中）

乞食にも喰はず嫌ひがあると見え

五年にもなれば父より字がうまく

いかめしき警察署にも花が咲き

菜の花の中に役場があるばかり

丸尾潮花（大阪）

一向に嫁ぐ氣のない娘をせめて

灯をさげて留守居の姉は縫ひつゞけ

一二通書く暇が有る女事務

また趣味を變へて名取りになるつもり

塗れるだけ塗つて女工に繼がなし

大坂形水（大阪）

まゝごとのさまをつくんで見てるは僕

掃除するだけに女中が四五人も

芋のこと米のことで常會終りたり

岩橋双虎（大阪）

引越の荷物縣道から這入り

海鳴りのする海がすきになりました

英靈を迎へて

犧牲てふものゝしづけさ見て戻り

酒井斗風（尾崎）

個人展裸像春陽にとけてゐる

感情を出しきる顔の哀れなり

儲つた話を聞いたはるの汽車

自轉車はひかる菜の花はるがすみ

北川春巣（大阪）

シャツクリ、アクビ、クシヤミと赤子忙しい

空氣枕をすぐ出す人と旅に居る

標札のゆがみに氣付く旅歸り

四月馬鹿友の結婚通知來る

櫻川不水（下關）

うんとこそ儲ける非人にもなれず

貸借は致しませんと台詞じみ

滅相な顔で千圓斷られ

どたん場でほんとのばかを知つたゞけ

まあ見とれ見とれと石の鉾けも出ず

百ワット蜻蛉が目まひしてあばれ

濱田久米雄（廣島）

球根へ朝ひとゝきの齒磨粉

七分咲き徹夜勤めの眼と知らず

妻病む

櫻、櫻妻には三分咲と云ひ

遺兒列車櫻の花が咲きかゝり

汽車の窓から手が屆きそうに櫻

菊澤小松園（大阪）

商人の肚へ戰陣訓ひびく
想はれて居るとは知らず廻覽板
眼を閉じて瞼の女とたゝかひぬ
米を食ふ時間へ時計覗かれる
臣道實踐そんならこれで行きまひよか

魚住滿潮（大阪）

肯定も否定も女背をむけ
膝に手を置いて勇士の母語る
病院船よくもおなごに生れたり
節米の不平は猫を抱きながら
閣取引あゝ重慶は何時陷る
閣取引御災難とは御挨拶
旅に病んで此處にしよんぼり芭蕉の碑
夕燒へ僕は賃金勞働者
常會の選擧落付くとこへ落ち
近衛さんも御苦勞ですと隣組
呼び止めて御報赦をする朝の霧
氣違ひの癒つてからのふしあわせ

清水白柳子（大阪）

腕章は櫻へ痴態ゆるさない
幹事して花にあやまる事が出來
櫻一ひら歸り仕度へ散つてくれ
驛長官舍櫻は柵のとこで咲き
ペンキ塗立櫻頓着なしに散る
スピーカー花の混雜さばいてた

西川愁水（西宮）

甲子園雜感

甲子園喧嘩しに來た人もある
萬雷の拍手白衣の勇士來る
迷子だつせ大阪辯がどなつてる
軍務公用呼出の聲すみきつて

中內翠芳（大阪）

動亂の平和何處に求むらん
病める子を殘して出勤時刻なり

多田市多樓（下關）

遺家族となり恐縮の日は續く
意地もつた氣を常會の夜に折られ
子が病んで覺悟のみだれかけた父
損などにふれずに無事を喜ばれ

濱田賢次（德島、日和佐）

土橋から土橋へ竿と竿と竿
赤い財布が今日は拂ふ日
お嫁さん義理で行くのか青白い
名も知らぬ草だが踏む氣にもなれず
算術のよこで母親縫ひつゞけ

大森風來子（廣島）

歸還二年餘を經て（二句）

掌を見て戰塵の消え果つる
たたかひの暇にも似たる生活する
寢不足は戰場を戀ふひとゝきか

麻生アート（堺）

ピリオツドこの生の身にあるやなし
ひとり言いふも勿體なき日向

掌篇川柳

芋力

小畑自由朗

お互ひに活辯から轉業して、漫才屋を開業してから此處に十數年、場末の小屋廻りながらも意氣の合つた名コンビとして、ちよいとだけ人氣のある鉛筆君と鐵筆君は住居もやつぱり隣同志だつた。

或日、鉛筆の子供が、鐵筆の子供の頭に、可成り大きなコブを造えたので、子供可愛さに鐵筆の妻君が、「ちいと氣をつけてもらひまへんと」と、子供のコブを突きつける樣にして、鉛筆君の家へ罷り出た。

「あんたはそない云ひなはるけんど」と、鉛筆君の妻君は「ちよいと來てみい」と自分の子供を引き寄せて「まあこれも見ていてもらひまひよ」と、其の膝坊主のかすり傷を突きつける樣にして、「お隣り同志のことだすさかいに、わたえもこんなことは云ひ度うはおまへんねやけんど」と、つんとした。

「そんならなんだつか」

「へい、おかげさんでうちの坊主に生傷の絶え間がおまへんのだつせ」

「まあ！やうそんなえげつないことを云ひなはる」

「うそやと思ひなはんねやつたら近所の人に聞いてみなはれ、あんたとこのボンのごんたは、此の邊でも評判もんになつとりまんねやさかいに」

「いゝえ、其れは知らぬが佛であんたとこそだす」

「うちの兒がどうかしたと云ひなはるのか」

「どうもこうもあつたもんやおまへん、昨日やつたかて、うちの坊主の齒芋を」

「まあ！」

「いゝえ、やめときまひよ、なにしろ喰べ物のことだつさかいに」

「いゝえ、云うてもらひまひよ」と、意氣はひ込んで乘り出すと「あれくらひなんぢやい」と、子供がべそを掻いたので、

「子供は正直だんな」と、鐵筆君の妻君が俄然勢を盛り返へすと、

「うちの兒を盜つ人扱ひにしなはる氣だすか」と、鉛筆君の妻君が逆上して、あわやッ！二人の間に暴力が振はんとするに及んで、たまりかねて鉛筆君が乘り出した。

「しようむない、たかゞ子供の喧嘩に親がのこ〳〵乘出すなんて、ちいと大人氣ないことおまへんやろか」と、鐵筆君の妻君にのしかゝっていつたので、

「さう云うお前は何んやね」と勢ひ鐵筆君も乘り出さざるを得なくなつて、

「何んやとは何んやね」と、鉛筆君が向き直ほつた。

「子供の喧嘩に親が出なと云う君からして出しやばつて居るやないか」

「さう云う君は其れで引込んで居るつもりか」

「まあ何んや、子供の頭に蚊が刺した程のことを、あんまり大

同舟近詠

御紋章仰ぐ屋根から花吹雪　松山　前田五十健

科學では千人針の割りきれず

水馴棹柳の下で背を跼め

打ち終えて刀師はもとの瞳にかへり

鎚音へ神人一如注連がゆれ　金澤　安川久留美

菜種だ松露だふる郷だ

お彼岸に我まゝ者のよい機嫌

ほんのりと百圓札をねぢこめる　兵庫縣御影町　長崎柳秀

年寄のさすが焚火の後始末

スチームの通る社に居て風邪をひき

笑ふ日もあらうと夫婦飯にする　奈良縣龜田町　嶋田翠峯

誘はるゝまゝに花見のすしを卷く　神戸　潮田明坊

年度末出張飲んで來た話

登られるとこへ登つた寫眞班　愚息遊學

入試合格の朝からハーモニカ　松江　勝谷山川兒

首なんか惜しくない人カレー好き

神曰く生命保險に入つて置け

國民服會、會、會の多い事

勘定書やはりバツトと書いてあり

親戚を歸らす友が來て呉れる　今治　月原宵明

仰に云うて來ん様にな」
「蚊？」「はいな」
「ふん、この大きなだんコブが蚊の喰ひあと位ひにより見えんのやつたら、其の君とこの膝小僧のかすり傷も蚤の喰ひあと位ひにより見えん筈や」
「せやさかいにうちの方は怒鳴り込まなんだ」
「うちも燒芋の方だけは辛棒しとりました」「燒芋？」
「はいな」「おいッ！」
「何んやね」
「もう一つぺん云つてみい」
「あほらしい、昨日の燒芋や、もうさめとりまつさ」「いゝや」
「いゝえ根が燒芋のことだすさかいに、もうむし直す氣は更にござりません」
「よおつし、そないに執念深う云うねやつたら」と、又話が芋え戻つて、「辨償したるさかいに」と、鉛筆君がクワッ！として鐵筆君の自轉車を無斷で引つぱり出してとび乘ると、何處ともなく姿を消した。さうした其の夕方、此の芋不足の時節柄を、何處でどうして苦面をしたものか、
「これで文句はあらへんやろ」と、鐵筆君の土間へ、ドスン！と一俵の芋燒を投げ込んだ。
「無茶すな」と、鐵筆が吃驚した。さうして其れを鐵筆君はやつこらせと肩に擔いで
「阿呆」と、鉛筆君の家の土間へ投げつけた。
「何をさらすね」と、鉛筆君が又其れを鐵筆君の土間へ投げつけた。

「此の野郎」と、其れを又鐵筆が、「何をくそッ！」と其れを又鉛筆が、「もうこうなつたら男の意地や」
「商賣もへちまもあるもんかい」と、かくて一俵の芋は、其夜彼等二人に商賣もやめさして、互ひの土間から土間へ投げ合ひされること十數回、先づ俵がクタ〳〵に成つて、次に、名にも似合はず鐵筆君がへな〳〵に成つて、殘念ながら自分の家の土間に芋俵を轉ばしたまゝで、つひでに仙氣を引起して、とう〳〵寢込んで仕舞つた。
「すまん」鉛筆があわてた、
「こんなことに成るとは知らんもんやさかいに」「いや、すまなんだのはわえや」「いゝやわえこそ、二人は一身同體で行かんならんちうことを、ついうつかりしとつたもんやさかいに」
「ほんまや、わえ等は二人で一人前ちゆことを忘れたらあかんのや」「ほんまにそれを忘れたが最後や」「やうわかつたな」
「ところで鐵ちやん、あんたとこ、お米さんどうしてはる」
「それやがな」
「ほんなら、今更こんなこと、ほん云ひにくいねやけれど、あのお芋さんな」
「はいな、其れやがな」
「ちいと、分けてもらへんやろか」
「何云うてんねやな、わえの方こそ、ちいと無理云はしてもらはんと」
「さうか、よう云うてくれた。ほんならさうさしてもらおうか」
「すまんな、わえが寢込んだばつかしに」
「あほらしい、すまんのはわえやがな」
「いゝや」「いゝや、わえがつまらん意地ッ張りをしたばつかしに、君にこんな苦勞をさして其上まだ鐵ちやん、誠に無理を云う様やが」と、土間の芋俵を指差して、「あれ喰うて仕舞う迄に、良う成つてもらへんやろか」「そらお前、良う成らなどうするねやな」と鐵筆君は眞劍な顏をした。「無理云うてすまんな」と、鉛筆君が頭を下げた「出せ！一億の　力ちゆ奴でな」と、鐵筆君が蚊細く笑つた。
「賴んまつさ」と、鉛筆君は又ペコリと頭を下げた。

まとまつた金欲しそうな金庫番　貸本屋素顏のまゝの女給來る
病院の雜誌不幸の手垢なる　みんな春みんな咲くのに少女の死
女兵（ニユイビン）の夢はかなく血に染まり　女兵へ禁戀愛の數ケ條

今治　長野文庫

不合格半月ばかり家を出す　隣組やつぱり地位がものを云ひ
一ト言も云はない代理出席者

名古屋　鈴木可香

半分が柳で見えぬいゝ蕎麥屋　果しなく小川がつゞく春霞
君ゆへに惱むと書いた南窓

長野縣須坂町　高峰柳兒

青春を忘れ名取を諦らめず　蒔く段取りで庭の隅妻と揉め

山口縣　三原狂路

教室でまた聞されるヒツトラー　飛行機で行く商用は儲けてる

小松　勝山しとし

世話やける子だねと嬉しさうに見え　責任を負ふとは何をするつもり

装造生供花花
飾花花花籠環
フロリスト
紅
くれない
大阪市西區京町堀通り三丁目
電話土佐堀五一三〇番

武玉川四編研究（十八）

梅本塵山
森東魚
姪子省二

（451）

目觸者の道に憎い蝶々

東魚＝たゞさえ、のぼせる樣な眩かな晴れた光景が想像される。病む目にちら〳〵する蝶も心憎い。（可憐なものを觀賞につくせぬ心憎くさと云ふ心持ち）。

塵山＝保名の舞踊にも、此の趣がある。

省二＝蝶々の飛ぶ時分の長閑さと、眼病み患者の心情の取合せ。蝶々になぶられるときもあらう。――ソコヒで長く通院しつゝある私には一層判斷し得る。

（452）

吹付られてミれハ故郷

省二＝暴風に吹付けられ、やつと夜が明けかけてみれば、そは故郷の海濱。

東魚＝小咄にある、「これは何處だ〳〵と云ふと大森」と云ふやうなのであつたと思ふ。

塵山＝斯る事は實際にあらう。

（453）

鼻血も錢の言ふ事を聞

東魚＝鼻血を出す樣な目に逢はせたが多少の錢をやつて、鼻がついたとでも云ふのか。

塵山＝錢ばかりか鼻血も出ない、と云ふやうな事を世に云ふ。

省二＝呪でもありはせぬかと、探しつゝあるが。

（454）

こゝろて髮を巻る關守

省二＝前篇に『關守の手を洗ふ黒髮』と云ふ句があつた。女の通關者だ。みごとな頭髮だと思ふ。

東魚＝關守がしかつめらしい顏で、内々うつとりしてゐる趣が可笑しい。

塵山＝通關の女を調べるのは、男でなくて女の役である。

（455）

火箸て明る面の魂

東魚＝眼の穴をあけるのに、初め燒火箸をつかふのではないか。（仕上げは勿論小刀を用ゐるだらうが）。何か火箸を使ふ事が凄いやうな心持ちもされる。

塵山＝前說の如くであらう。

省二＝「魂」と云つたのに火箸に對し、するどさが現はされてある。

（456）

今上る帆の片裕に成

省二＝帆を上げる際、片裕のやうになつてゆく事は、常に實見するところだ。

東魚＝寫生的であり片裕といふ諧謔的な表現が面白い。江戸坐の特長であらう。

塵山＝是れを俳味とでもいふのか。川柳には見られぬ趣がある。

（457）

辛子の紙を重く引たて

東魚＝辛子をかくのに、水で辛子粉を茶碗などに練つて、上へ紙を當て炭火を一つのせ、流しなどにふせて、あく抜きをし、さて其當てた紙を引きはがすので辛子がねつとりしたので紙が取れにくさまを、「重く引たて」と詠んだもの、其趣を描き得て居ると思ふ。

塵山＝賛成。

省二＝賛成。（別な場合であるが、私は鬼角病み勝ちなので辛子濕布をやる。辛子のつけられた紙を、いつも重いものだと感ずる。）

（458）

枚方を歩行ぬ代り踏れけり

省二＝枚方へ下りないので、船中にあつて下りる人に、一寸踏まれる。

東魚＝賛。三十石船の旅寢の趣である。

塵山＝枚方は一時船の停留する所で、船より上る人の爲に、寢てゐる人の足を踏まれるのである。

省二＝丁度新聞紙に左の記事があつた。

こゝはどこぞと船頭衆に問へばこゝは枚方かぎやうら…

淀川あたりの船頭が今だに昔を偲ぶ大阪府北河内郡枚方町にある德川三百年の名物「かぎや裏」が大淀治水工事の犧牲となつて埋られる。

「かぎや」は慶長の頃枚方の宿驛に出來た旗亭で「裏」とはこのかぎやの船着場、江戸から、京から下る諸大名はこゝに本陣を置き三十石船を漕ぎ寄せ花街に旅情を慰めた賑やかさは「かぎやうらには錨はいらぬ。三味や太鼓で舟とめる」の唄の文句でも想像される。

その「かぎや」も三百七十七年續いて數年前つぶれ、淀の主が棲んでゐるといはれる二十尺以上も水深のあつた、「かぎやうら」も今は見る影もなく土砂で埋まり、土砂運搬車が走り始めた。町の古老たちは碑を建てゝ後世に傳へたいと話を進めてゐる。

（459）

言切て出る傘の開キ過

東魚＝襖をピシヤリとしめるのと同じ趣。片手で煽つてポンと開くのであき過ぎる。

塵山＝所謂猪口になるのであらう。

省二＝十六編には『腹立てさす傘のひらき過』。

(460) **乘物へかわり〳〵の請こたへ**

省二＝乘物で旅立ちする折り、代り〳〵に挨拶をする。應對する。

東魚＝女の人が旅に出る趣が思はれる。

璽山＝女の旅行で、身賣りではあるまい。

(461) **あハぬ別の三十日朔日**

東魚＝相接してゐるが徹頭徹尾逢ふ機會がない。三十日と朔日の如く。とではないかと思ふが。

璽山＝少し理窟ぽい句である。

省二＝離苦を晦日朔日の會ひ得ぬのに譬へたものならむ。三十日朔日の他の用法として『大屋の顔も晦日朔日』（武・十六）

(462) **髪をきられてのふ〳〵とする**

省二＝「のふ〳〵とする」のだから、特別の場合があるかもしれぬが、「入髪でいけしやあ〳〵と仲の町」といふ、例の吉原の髪切事件たらむか。

東魚＝吉原で切られたのであらう。づう〳〵敷いと負け惜しみとの心持ちなのであらう。

璽山＝諸方を逃歩いた罪人が、捕縛された時のやうな心持であらう。

(463) **團扇にのせて天瓜粉ぬる**

東魚＝團扇の上へ、今用ふるだけの天瓜粉をのせてきて、湯上りの子につけてやる。その團扇は粉をつけてしまふと、忽ちそれで涼をとる事になる。

璽山＝團扇を道具に用ゐたのは、大いに働が有ると思ふ。

省二＝確に働いて居る。今のは亜鉛華製であるが、私の幼時のは黄烏瓜の根から採つた。此句通りの場面は度々ある。

(464) **異見の仕廻洗湯へ入り**

省二＝異見する者される者、倶に餘り心持のよいものではない。だから仕廻ひには洗湯に入つて、さつぱりとした氣分を取戻す。風呂は命の洗濯とさへ云はる。

東魚＝分つたらそれでよい、まあ一風呂浴びて來やうとの親しみで、「洗湯へ入り」に、自然なユーモアがあると思ふ。

璽山＝雙方のいやな氣持も、風呂の湯に洗ひ去られる。

(465) **手代ハ聟にならんとすらむ**

東魚＝かうした口調の古歌にすがつた處が、作者の機智である。

璽山＝上品な滑稽で、自然にほゝ笑まれる。

省二＝「ならんとすらむ」。いかにもとうなづかせる。

(466) **上意か濟と揃ふ圖雨**

省二＝上意を承はるべく、皆揃つて居るのだから濟めば、皆が動く。その影法師が揃ふといふのか。

東魚＝上意を聞き終つて、一齊に頭を上げた圖雨が揃つたのではなからうか。

璽山＝上使の歸館を見送るとて、一同低頭する光景でもある歟。少し芝居掛りである。

(467) **ふとんを遠くかふる汐時**

東魚＝お産の場合、亭主が産婦と離れた部屋で、唸り聲を聞かない樣に布團を被ぶつてゐる。汐時は子の生れるのが、上ゲ汐時といふ事になつてゐるから、かく措いたのであらう。

璽山＝東魚君は屢々この經驗が有つたであらうが、自分も無經驗ではない。

省二＝殘念ながら私は絶對に無經驗。此句の次ぎに「叱られて亭主めでたく湯をわかし」。

(468) **夫婦か剃て子ハ牡丹也**

省二＝牡丹は百花の王といふ。『子は牡丹なり』は、詮じつめれば子寶の意かあやしつゝ夫婦で剃つてやる。蝶よ花よといつくしむ樣。

東魚＝夫婦共に隱居し、佛門に歸依して、揃て剃髪したのではないか。（亭主が在世中に、女房が剃る樣な事はなささうに思ふが、句の工合がどうも其樣に響く氣がする）。

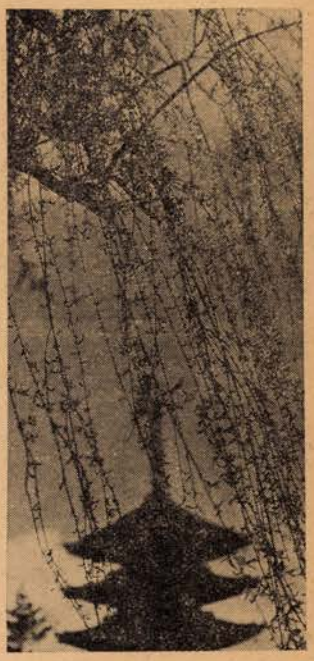
璽山＝前二說は受入れられないが、自分にも正說は無いのである。

武玉川四編研究正誤表（二〇七號）

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
一〇	二	一	與	與
一〇	二	二二	「闇」をつかむの	「闇」の字脫落
一〇	四	九	拔	秡

吟行地調べ 奈良篇（三）

麻生路郎



（13）鹿寄せ

★鹿寄せは縣や市で賓客を待遇する時などの餘興に、公會堂の庭などで行はれる。

喇叭を吹いて澤山の鹿を驅り集め、賓客の手づから餌を與へさせるのである。

一般の遊覽客でも、團體の遊覽客でも、鹿寄の壯觀を觀たい希望者には、神鹿保護會（電話二三八八番）へ申込めばいつでも鹿寄せに應じて呉れる。一回の料金が十三圓である。

鹿寄せがあるなと感じると、まだ喇叭を吹かぬのに、ソロ〳〵寄つて來る鹿もあるそうだが、遊覽客の多い三四月には、空腹を感じてゐないので、喇叭が鳴るのに行かないでは義理が惡るいと云つた恰好で、ノソ〳〵集つて來るそうである。その點人間も餘り鹿を笑へない。

鹿寄せの笛もきこえる奈良の宿　美根子

割勘で鹿寄せを見ることに決め　葭乃

宮様と知れる鹿寄せ見て歸り　路郎

（14）角伐り神事

★毎年十月の中旬頃、晴天の日を選んで、神鹿保護會では角伐り神事を行ふ。飼養場の一端に、角伐場を設け、入場料を取つて一般に見せるのである。鹿は豫め、幾頭かを集めて角伐場に入れて置いて、太鼓の合圖で一頭づゝ取押へ、鋸でその角を伐るのであるが鬪牛に比すべき餘程烈げしい觀物である。（若草山の麓の土產物を賣つてゐる店で、店内に角伐の人形を飾つたり、光景を描いた額を掛けたりしてゐるから立寄つて縱覽されたい）

★鹿の角伐りは人皇百十一代御西天皇の寛文十一年、春日神社の神鹿の角を伐つたのが始めで、これは神鹿が自由に市中に出て、人畜に危害を加へたことがあつたので行はれるやうになつたのだが、明治維新後、一旦中絶してゐたのを再び明治四十一年頃から毎年秋にこれを行ふことゝなつたのである。

角伐りは夕日をうけてくたびれる　葭乃

角伐りは又鉢巻を締め直し　路郎

（15）奈良晒

★江戸時代に、奈良の名產と言はれたものに、晒布・墨（前號參照）・武具・漬酒・團扇等々々があり何れも古川柳に詠出されてゐるが、殊に晒布は奈良晒と呼ばれて、江戸時代に於ける我國麻布中最上等品を意味し頗ぶる珍重せられたものである。

★奈良晒の創始は何時頃であるか判然しないが、その名が世に知られるやうになつたのは、近世の初、大和大納言豐臣秀長が郡山城に入つて大和を所管した天正年間の頃からであると云はれてゐる。

★奈良の晒業の最初に起つた地は奈良の北郊佐保川畔の般若寺村である。佐保川の流で洗ひその岸邊で晒したので佐保川の水と奈良晒とは離れることの出來ない關係にあつた。次いで添下郡の疋田村（西大寺の西南）にも晒業が興つた。これも佐保川の水を利用した。そして江戸時代の初期には般若寺村に十二軒（内一軒は水門村）疋田村に十四軒であつたが、延寶七年に一之井村に三軒晒屋が建られ、都合二十九軒となつた。一之井では能登川の水に晒したのであるが、後に三軒の中、二軒まで般若寺村へ移つてしまつた。

★斯うした歷史をもち、天下を風靡した奈良晒も、江戸時代の中期、元祿頃を絶頂として漸次衰退した。盛時には三十軒近くもあつた晒屋が幕末安政の頃には般若寺村に四軒、疋田村に一軒といふ淋びれ方であつた。その原因は我國產業の發達と共に、京・大阪その他の諸國にも晒布業が發達し、優秀な晒布を產するやうになり、奈良晒の獨占的地位が失はれたからである。

しかし、奈良晒が、今なほ名品であることは全國に多く產する麻布中、奈良晒が特に選ばれて、伊勢神宮の御用を拜し、又高貴の御料として宮内省への納入方を拜命してゐる點から見ても明らかであらう。

★次に奈良晒に關する古川柳を二三紹介しやう。

ねむつたい縞柄はなし奈良晒

さらし屋は江戸にゐるうち朝寢する

さらしつゝ杵で数へる三笠山
内談で鹿を手杵でおつぱらひ
晒屋と墨屋基をうつ奈良の雨
鹿の背をわけて晒にしがみつき

江戸時代の奈良を懐古する時これ等の句には奈良の朝起、神鹿に關する捉、奈良を代表する名産などが諷刺的に或ひは皮肉に詠まれ、それ〴〵に奈良の匂ひ、奈良の味が色濃く出てゐて興趣が深い。「鹿の背をわけて」の句は夕立が來たことを意味するのである。

(16) 依水園

★奈良晒を紹介した序でに、奈良晒とも關係があるので奈良の名園、依水園のことを少しく書いて置きたい。依水園は個人の所有に屬するだけに、所謂名所案内などには書かれてゐないし、誰でも入園出來ないので、一般には知られてゐないが、人を介してたのめば、觀せて貰へないこともない。曾て縣に寄贈してもいゝといふ話も出たそうであるが、その維持費が問題となり、折角の話も立消えとなつてしまつたといふことである。

★依水園は佐保川の小流に臨み、南は氷室神社の後方に隣接し、東は東大寺の南大門前まで擴がつてゐる。園内には幾棟かの茶室があり、後方の池には常に清水を湛え、南大門、若草山を自然のバックとし、林中には名も知らぬ小鳥が囀づり、實にさびのある名庭園である。

★この池に面して古風な一屋がある。大和の柳生村から移されたものだと云はれて居り、その昔、宮本武藏が柳生但馬守宗嚴（石舟齋）について修業してゐた時に起居してゐた家だと云はれてゐる。宗嚴は柳生但馬守宗矩の父であり、柳生十兵衛三嚴や柳生飛驒守宗冬の祖父である。柳生家は代々大和國柳生に住した大和の舊族であつた。宗矩の時、德川幕府に仕へて三代將軍家光の劍道の師となり、大和に於て一萬二千五百石を領する大名に取立てられて柳生藩の祖となつたのである。その父石舟齋時代の一屋が、この依水園に移されてゐるのも興味が深い。

★依水園は元、東大寺の圖中の南院であつたが、後、興福寺の萬壽院の別業であつたさうだ。

依水園の一部

★依水園を建設したのは苗字帶刀を許された清須美源四郎（慶長の初に晒法を苦心考案奈良晒の名聲をあげた功勞者）と七郎子爵が、この名園を愛し賴山陽の額の文字に因んで名づけられたのである。

★現在の依水園は三回位に增築擴大されたもので、大部分は奈良晒の晒場であり、あの池も佐保川の水が段々減水し、汚濁されるので、一旦あそこへ水を引いて、晒に適する淨水とするために掘つたものだとは、晒屋を業とされてゐた前住者であり奈良の名望家である關信太郎氏（祖は奈良晒を業とした水門村源七）の談しである。

★依水園を句にすることは難しいが、兎に角發表して責をふさぐことゝした。

依水園南大門の影も落ち　蔭乃
依水園俯瞰圖の中歩くやう　同
今鳴いた鳥はどの枝依水園　同
鯉なんぞ徒まぬがうれし依水園　同
依水園晒したころは人くさく　路郎
依水園晒場だとは嘘のやう　同
依水園釜に名殘りをとどめて居　同

(17) 八重櫻

★奈良縣立師範學校の正門の入口に一株の櫻樹がある。これが有名ないにしへの奈良の都の

八重櫻で、こゝは興福寺舊境内の一角で、昔は東圓寺といふ八角圓堂のあつたところである。

★立札には

八　重　櫻

詞花集に一條院の御時奈良の八重櫻を人の奉り侍りけるをり御前に侍りけれは其の花を賜りて歌よめと仰せられけれはよめる　伊勢大輔

いにしへの奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬるかな

砂石集ニ上東門院奈良の八重櫻を都にめされしかは大衆いとひんなくおもひさくらを掘りてえそまゐらすましくいなひたるよし　女院きこし召し給ひて奈良法師は心なきものとこそ思ひしかまことに色ふかしとて櫻はめさすなりにけり殊に伊賀國余野の庄をよせ給ひて花の盛り七日の間宿直をして守らせ給ひけるかくありけれは余野の庄を改めて花垣の庄とは名つけられしとそ

此地元興福寺内東圓堂の跡

花は俗ニ八代目の株と傳ふ盛は晩くて四月末なり

と誌されてゐるが、風雨にさらされてゐて文字が不鮮明である。

★八重櫻といふ名稱は或る花瓣の種類につけられた名で、一木が獨占してゐる譯ではない。從つて春日神社境内にも知足院（正倉院の裏手）にも八重櫻がある。春日神社の立札には

詞　花　集

伊勢大輔

いにしへのならの都の八重櫻けふこゝのへににほひぬるかな

と簡單に紹介されてゐる。

★知足院のは

天然記念物知足院奈良八重櫻

注意

この八重櫻は昔から名高い珍らしい種類でありますから花や樹枝を折り採つたり木の幹や根を傷つくることは許しませぬ　内務省

と心なき人々をいましめてある櫻もこうなると、なか〳〵厄介である。樹幹二尺八寸、高さは二十餘尺で盛んに生育してゐる。

★八重櫻はケヤマザクラの變生であらうと云はれてゐる。

★この八重櫻を詠んだ古川柳では

八重櫻鹿の靈寢の上へちり

九重に詠んで名高い八重ざくら

奈良櫻一重よけいに匂ふなり

御所近く匂ふ名所の八重櫻

八重を殘して九重を京へひき

鹿がいさめば花のちる奈良の町

などがある。伊勢大輔は父大中臣輔親が伊勢の祭主であつたところから伊勢の大輔といふのである。

今人の句では

幾代目奈良の都の八重櫻　艸樂

八重櫻咲くのを待たず奈良を立ち　蘆乃

八重櫻俥に乘つたまま眺め　同

八重櫻咲かぬ時にも見あげられ　路郎

八重櫻ここで先生取りまかれ　同

（18）手向山八幡

★若草山の北端續きに茂つた山がある。これが紅葉で名高い手向山で、その麓に縣社の手向山八幡宮がある。

この神社は明治維新の神佛分離のために手向山神社として獨立したものであるが、その昔聖武天皇が、大佛を造らうとし給うた時、豐前宇佐八幡の神慮を窺ひ、その加護を祈られ天平勝寶元年大佛が出來上つたのでこゝに鎭祭して、その守護神とされ給うたのである。社名は古くは東大寺八幡宮又は南都八幡宮とも稱へてゐたのであるが、明治維新後山の名に因んで手向山神社となつたのである。

★南方に若宮があり仁德天皇を祭つてある。その拜殿の脇に菅公腰掛石や八幡形の石燈籠がある。菅原道眞は從三位參議菅原是善郷の第三子で、古今集戀旅の部に「朱雀院奈良におはしましける時、手向山にてよみ侍りける」と詞書して

このたびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵

の歌がある。この歌は百人一首であまりにも有名である。

社殿は南北に長い一棟、その中央に應神天皇、向つて右に比賣命、左に仲哀天皇と神功皇后とを祀つてある。攝社は五つ、末社が十七ある。お社の寶物中には舞樂面の優秀なものが多數に傳はつてゐる。何れも國寶である。

★例祭は十月五日で神輿の渡御があつて仲々盛んである。節分の日の午前十時頃から拜殿で珍しい御田植祭が行はれる。この日神社から福ダネと松苗といふのが頒布される。福種はモミマキの時に神の守護を尊んで農家各自のモミにまぜられるもの、松苗は長さ一尺ばかりの清められた松の小枝で、ナハシロの水口に挿してその安全を保證される料なのであるそうだ。

★手向山を詠んだ古川柳では

言の葉の錦を幣に手向山

取あへず御歌を幣の手向山

などがあるが、何れも菅公の歌に關聯したものである。

狸

補追（其の三）

前田五健

日本的狸具の蒐集大家、伊豫道後温泉前、道後町會議員（明大出）富田壽久氏（號は金鼓堂、狸通）の原稿を戴いたのでこれをお目にかけます、遠く印度や支那からも集めた澤山の狸具はすばらしいもので、昭和十四年十一月十四日に第一回「皮に化けた報國狸まつり」を行ひ毎年春秋にこれを續け本年も近い内に擧行の準備中であります。感謝鼓腹、明朗、不惜身命、何も彼もお役に立つ「狸」そして笑ひと何かの教示を持つ大人のお伽話「狸」傳說物語も、これで本當に終りと致します。（健）

私が狸の蒐集を思ひついた動機は大正十三年私の學生々活最後の多の初めでありました。

薄ら寒い夜をブラッと出て澁谷の道元坂の夜店を漁つた時、一組三態の狸像が輕なその貌と恰好でそれが愛想よく客に呼びかけて居るかの如く又たその夜店の主を夜風の中に大事後生と心から守り慰めて居るかの様に見へました、其の落ついた頼母しさに私の足はヂット引付けられたとでも申しませうか、こんな氣持ちの動機で求めて歸つた。此の三匹の狸像からうけた私の狸宗趣味は心を鎭めて眞理を見出さうとする禪味、人情的で親しめる相、男性的で陽氣で腹が大きくて稚氣が在り憎めない變化率、處世須らくこれだと獨り悟つた様な理窟を得た譯であります。

それから自ら狸通と號して次から次へと變つた狸器へ狸相へ、狸話傳說、文献へと他愛なく今日まで續けて居る次第です、蒐集上の苦心成功などは一ト息にはお話が出來ませんが旅行先で求めるのは、さうでもありませんが今では狹い伊豫の郷土では折角欲しいと思つた狸器を見付けた時など眞向から買出しに飛びつくと狸通の足許を見透かされて、ヤレお家の寶、守り神だの、商賣上必須宣傳用の福の神などと申して非常呼ばはりの振出しでイザとなると、突飛もない値をフキ掛けられるので、手を代へ品を代へして長期策戰に出る時の待遠しさと焦燥……そして得られた時の快哉……

こんな事から物の蒐集家の蒐集慾が昂じて遂には所謂コレクトマニアなる病的心理から、とんでもない事を引起すのでせう。

例の富豪で日本的石灯籠の蒐集家某紳士が鎌倉のさる由緒ある大寺から國寶級の石灯籠を失敬して來て自庭に据えて秘かに誇つて居たなどと云ふ話も一面趣味上から同好者の多少の寬恕を以つて思ひやられる次第かと存じます。

私の狸の數は左様……今のところ材料別にして金石、竹木、紙布、牙骨、貝角、陶器、硝子漆乾果、繪畵とそれ〴〵變つた種類で六百四以上位ひ居るでせう、差詰め松山の狸騷動の八百八狸に緣とつて八百八匹と狸の句に八百八題を計劃して樂んで居ります。私の句ですが、いやどうも、ものに成りません。

仔狸の親に外れて今朝の月　狸通
伴連れて狸化け込む花の宿　同

それよりも狸庵、中橋德五郎田義雄先生の御句に

檻にあれば誰も打たず狸哉
狸鳴くや稻塚遠く月に在り
モウそろ〳〵月も上つたやうです。デハ此邊で尻尾を出させて戴きます。（終）

日本最古の古典藝術
鄉土を愛する農民達
が自ら育み來つた土
の香も高い農民藝術
がキヤメラの力によ
つて完成された。
演出
撮影　坂本爲之

大阪市東區南本町二丁目四五番地
深田商會映畫部
電話船場㊽四四四一至四四四三

狸の川柳

狸チラと區劃整理の事をきゝ　曉童
化け終えたトタン狸へ栗が落ち　同
司會する狸は月を負つて立ち　耕一路
狸ではないかと云へずイ、女　同
狸先づ尾の振り方を教へられ　蝶久
人間が歸つて狸花見する　靈子
狸そろ〳〵化ける仕度の鐘が鳴り　同
つくづくと見れば狸も愛嬌もの　漫歩
醉漢へ狸ふざけて見たくなり　同
豆狸には割當てが無い酒切符　何毛子
聖戰下狸化けるに骨が折れ　春秋子
狸今日化け損なつた尾を見られ　晴朗
近頃の入試狸は不思議がり　赫堂
狸にも馴染故郷の話よし　五健
花が降る笠きて狸化けて來い　同
御時世へ狸捨身の御奉公　同

近作柳樽

路郎選

常會へ出る日と髪を結ひに行き　岡山　生子洋子
鷄を飼ふ殘りものやつて生ます氣鷄を飼ひ　同
批判癖人生を狹く生き忠孝の道は舊體制の儘でよし　同
仕樣がないやはり笑うて生きてこかゴム底のチビ樣も下級官吏型　同
或人へ見くびつた貴方は强い人でした米粒へ千字書く指ちよぎりたし　台北　横山勝二
貯金帳だけでは足りぬ未亡人　同

台灣雜吟

台灣の花は眞つ赤だ娘も眞つ赤　同
藝姐（トアシン）の足から冷える雨となり　同
七面鳥芭蕉の花の雫へ居　同
想思樹は咲きたいのから咲いて居る　同
行路死の隣は愛犬ベスの墓　大津　鈴木石鹿
大道は火葬場へ通ず坦々と　同
滿員へ描いた眉毛の近すぎる　同
此の下情どうか天まで屆くやう　同

米大統領に寄す

邪魔すれば烈しき音もたてる風　同

日吉神社參拜

勿體なし國寶の橋踏んで立ち　同
眼のくぼみひよいとしやりこうべを思ふ　仁川　山田蠻歌
藝術は大人の遊戲場でした　同
怒鳴つては見たが淋しい天氣です　同
喪服着てこの娘に別な美しさ　同
その手紙それから空を見てゐない　同
空氣にも感覺ありて見合の日　同
いさかひし人から春のたよりが來　岡山　本田ユリエ
青春（はる）謳歌して蟲媒花風媒花　同
アドレスも忘れる程に遠ざかり　同
兎も角もデスクブランの多いこと　同
涙など吸つたハンカチ洗つてる　同
丸刈も簡素の中の美しさ　同
靈柩車次のお客へ掃除する　伊丹　酒井美知夫
甲冑を賣る店今日は客があり　同
縫ひものゝ針うしのうた聲となり　同
早よ伸びて欲しいパーマの世とはなり　同
春さ中腦病院の塀高し　同
水仙へしやがんでひとり詩をつくり　岡山　岡眞理子
友だちが何であらうと想ふ日よ　同

滿洲雜記（四）

湯淺小城子

君の、お前の、と云ふ意味であるが、大部分の日本人は君と、君に、お前を、お前や等々の意味にも使用して居る。本當は間違つてゐるのであるが、今日ではそんな文法的な拘束を離れて你的、我的、他的等の言葉が、所謂日本人の滿語として、滿洲至る處で通用してゐる。

你的（ニーヂ）と云ふ言葉がある。之は

內地で結婚式を擧げ、旬日を出ずして歸滿した日君、奥樣を呼ぶのに、盛に此你的を使つてゐる。感想に曰く

「お前と云ふのが未だ板につかず、かといつて名前を呼ぶのも一寸照れてね、まさか貴女とも言へんし、困つた擧句が你的に落付いたんだよ、呼び安くて能率の上る點から云つて之に限るね」と

日系の滿語矢鱈に的が付き

○

內地と異り、滿洲の列車は車は雄大で美しく見えるが、乘心地は餘り良い物ではない。（但し之は三等の場合）と云ふのは臭氣芬々たる農民や苦力等が、多勢一緒に詰込まれてゐるからだ。としてなまじ座席が廣いばかりに、滿員にでもなつて來ると、二人並んで座つて居るところへ三人目が割り込んで來る、（事實二人半位の廣さはあるが）長所忽ち短所に變る譯だ。

水ぬるむ頃よ二階の洗面所　同
お湯のみの影も春です事務机　同
國旗まで洗ひ日曜氣持よく　同
手内職聞きわけをして先きに寢る　和歌山　秋月宏方
落ちぶれた思ひ小犬に吠えられて　同
百姓は日の出月の出田で拜み　同
なつかしさ假名の教科書讀んだ頃　同
婦人科へ子供が欲しい二人連れ　同
小兒科へ雨の夜更の言つとれず　愛媛縣大洲町　米澤曉明
小さい手へ玩具持たせて見るも親　同
故國の母切符をシカト握りしめ　同
甲の上それから軍艦ばかり描き　同
あの銅羅が別れとなつた殊勳甲　同
君次男なら支那へ行き給へ　大阪　富岡巨人
いかに申候とて金が要り　同
新大使スキヤキと云ふものを喰べ　同
目刺三匹月末の膳　同
すれ違ふ洋車へ擧手の禮となり　南支　米谷松太郎
歩き勝つこと唯默々として歩き　同
兵隊の後姿も神に似る　同
自我捨てゝ今日もラッパに親しみぬ　同
家庭訓一應妻の意見きく　大阪　平井龍川
買物の長蛇をスパイ見逃さず　同

琵琶湖の悲劇

遭難に眞白き富士の嶺を憶ひ　同
嫁く女工島田で社長室を出る　同
消火器の色塗替へて春となり　尼崎　飯尾寄與史
病人がガラスをふいてくれと云ふ　同
偉らそうに云ふ巡査にも母がありたまにする花見喧嘩をして戻り　同
メートルと尺へ母娘ではがゆがり　松江　松崎專太郎
このごろのそこらに閑地見當らず　同
もんべ着てやはり奥様何もせず　同
持ちあるくだけで汚した新刊書　同
雨の日の公休爪をきっただけ　廣島縣　平川久枝
なまなかの理性女の不倖　同
たすきかけたまゝ手紙を書くくらし　同
そむく事ふと考へた灯の細さ　同
賣り惜しむ藏ならねずみ噛んでやれ　布施　岩本晴美
内の子も習字を嫌ふ通信簿　同
洋館も宗旨は同じ朱の鳥居　同

友人應召

櫻咲く兵舍が友の征く所　同

父逝く前後（四句）

水飴が漸く買へて間に合はず　兵庫縣魚崎町　谷口寒草
豫期してた危篤の電話慌てまい　同
男等は泣ては居れぬ葬式だ　同
公益社まづ悔みから言ひはじめ　同
新一錢の光りうれしい子の財布　松江　梅本登美也
金遣ひ荒い娘がゐる高利貸　同
故郷まだ同棲してるとは知らず　同
網棚からおろし故郷の森が見え　同
左程にもないに恥しがつてみせ　栃木縣竹原町　杉原愛鳩
呱々の聲もう人間の運不運　同
常會に持出す程の仲違ひ　同
米の値も知らずに顯微鏡とゐる　愛媛縣竹原町　西野みづほ
母さんは曲馬にやると叱らはり　同
婚約をSさんに丈知らすなり　同
阿波訛施米出來ぬを淋しがり　徳島縣　矢田壽澄
一椀の味噌汁にふと故郷のこと　同
人混みのはし叮嚀な御挨拶　京都　馬場理公
ウインドの中の會社員哀れ　同
死んで歸れと父お護符ですと母　同

其ような三等車へ勇敢に乘込んで來る日本人の中には、出張旅費の一等、二等貰つてゐさうな紳士も居る。が其人達の中には、何一つ菓子も賣つてなければ、何等の慰安もない。僻遠の地で淋しく父の歸りを待つて居る子供に思を走らせて「まあ今日は三等で辛抱して、餘つた金で坊やに御土產を買つて歸つてやろう」と云ふような有難い親心の人も居る事であらう。或る日大陸の曠野を驀進する列車の中で斯んな想像に、耽つてゐたら一句浮んだ。

出張は三等にした子煩惱

○

私達の街へ、支那芝居が興業に廻つて來た。木曜日の午前、事務所へ可愛らしい小姑娘（役者）を十名程連れて、座長と云つたような男が來て、約一ヶ月興業するから何分宜しくとの事「まあせいぜい誘合つて觀に行くよ」と言つておいた其約束を重んじて、と云ふ程でもないが日曜日の徒然なるまゝに、當日の呼物三國志を觀に出かけた。入場料金五十錢也出して粗末な小屋に入つて見ると、既に始まつてゐる。が觀るほどに、考へるほどに、何がなんだか判らなくなつて來る。そりやそうでせう、支那芝居を觀るのに約束事を、知らなけりや、解る道理がありません。と後で滿系に笑はれた事だが、とに角面白くないから中途で歸つてしまつた。ま

さもしきものは職業野球の盗壘　同
女事務神經質な母を持ち　東京　森本秋子
ねたましい戀のすべてへ何故死なぬ　同
春の雨ひとり蛇の目で來る銀座　同

姉の長女高卒にて生活戰線へ

生活の一線に立つ長女にて　廣島　大山露斗
晩酌へすなほにあぐらかいて無事　同
蒟蒻はこんにやくだけの味を持ち　同
裏返す封筒有るぞと持つて來る　大阪　小川恒明
病院船故國が見えて無念がり　同
軍服をきればなまりは何處へやら　同
もう一度笑つて高い〳〵され　島根　田中弘樓
ようこそと義母へ電球つけかへる　同
丸刈の貴男で絣よく似合ひ　同
爆笑を殘して中繼終いなり　布施　小谷華素兒
甘やかすまいぞ御國の盾ならば　同
用水桶昔に還る街の角　同
別れましたのと女ぽつんと言ひ　大阪　星伽龍兒
人妻の哀れを見せて酒をつぎ　同
花々と山を見るのが好きなのさ　同
便乘派無視して船は出てしまひ　岡山縣　內藤紫翠
多子家族カメラへはいりかねる程　同
片脚となる氣白衣の士へ嫁ぎ　同

從軍回顧(三句)

花一ツ二ツ擬裝の鐵兜　布施　上田翠光
戰友の足鐵帽でよけて寢る　同
唇の熱い煙草へ順を待ち　同
訃には一寸つまつた速記席　松江　本庄進一路
つまらない作だと思ふ植字工　同
つんとした女・女給をやつてゐる　同
女教員夫を置いて轉任し　ハワイ　長谷川猿吉
移民だつた親を知らずにベスボール　同
衣食住夫に任せ溜めてゐる　同
黃塵にうそぶく駱駝目をあけず　大阪　宇敷桃水
王龍の耕し大地へ麥の芽が　同

陸軍記念日

破壞作業演習の兵たのもしく　同
慰問文戰地も花が咲きますか　名古屋　八幡勿來
春の夜を愁ふ十九のお孃さん　同
そんなこと返事にこまる借電話　同
事務服も七年間を勤めぬき　廣島　福原魔美
ホームシック歌でごまかす癖がつき　同
二夕親の無い子同情さけてゐる　同
巡り逢ふその約束をまだ信じ　兵庫縣　花柳蘭子
コンバクト退社に近く塗りはじめ　同
連れ出した方が弱つた奥の院　大阪　和久双葉
女の子言はれただけで泣いて來る　同
左手を使ひ傷痍の眉太し　岐阜　市川童顏
ドツシリと見よ東海のモンペ隊　同
口々に平和稱へて新兵器　堺　野島神樂
無信仰案外無事な家庭なり　同

淺間溫泉(二句)

出湯サラ〳〵モンペーが米をとぎ　大阪　橋本美奈子
茶柱に山は冷たくそびえて居　同
晉立てゝ折られ筍町へ出る　大阪　古川鶴聲
早起へバツタリ出逢ふ洋服屋　同
二合三勺それで一日無事にすみ　大阪　石川ひさみ
パジヤマ着てあすのプランを考へる　同
隣組狹い座敷を讓り合ひ　大阪　竹部香林坊
本心は怒る氣でない隣組　同
一別以來だと懷しい名刺くれ　京都　野口柳太
危つかしいとこで辨當喰ふ若さ　同
思出を額にして母生きのこり　下關　國弘半休
死を覺悟したこともある日記帳　同

あ今後の機會迄に其約束事とやらを研究する事にしようと思つてゐる。因に約束事の例を二三例記すれば——櫂(之を持て潛ぐと舟が出た事になる。)提灯(を持出すと夜の場面)陰旗(幽靈の出に使ふ)馬鞭(之一本で馬が現れた事になる)

○

渡滿當時、滿語の少しも出來なかつた頃には、出張等で新京に出るのが、實に苦しかつた。バスには臭い農民達が超滿員で日本人はめつたに出逢はない。どちら向いても判らない言葉でがや〳〵言つて居る。かと云つて本等讀むには、餘りにも車の動搖が激しすぎる。やかましくて眠りも出來ない。それも三十分か一時間位ならまだしも、三時間かゝる。(實に唖の如き)がまだ行く時は若干の樂しみもあるけれど、歸るバスの中のつらかつた事。

○

滿洲の農村地方で、他家を訪問する時には、第一番に挨拶として「看狗々々……犬の番をたのむ」と大きな聲で呼ぶ位、大抵の農家で、獰猛な犬を一頭乃至は數頭も飼つて居て、知らぬ人を見ると、吠えるだけならまだしも、かみつかれる事がある。一軒の家ですら既に之であるから、村全體、街全體となると、大した數に上る。では何故こんな大きな犬が澤山居るかと云ふと、昔治安の惡かつた頃には、

悼妻の妹の死

就職のうれしき顏の見たかりし　大阪　加藤ライト
日曜も休めぬ父だ我慢せよ　同
デマが飛ぶ程働いて〳〵　大阪　吉川琴靡
女店員元は女工と書いてゐず　同
目印を赤糸で縫ふ子澤山　大阪　有馬千斗
寫生する人へ孔雀は擴げない　同

包頭陸軍病院回顧

笑はすなこゝから呼吸が洩れやがる　大阪　南　要兒
繃帶の譫語はまだ彈の中　同
友征きてふと學生の身は寄つ　大阪　松村茂路
車窓でも母は身体のことばかり　同

松岡外相獨伊訪問

もてるとこ撰つて出掛けたかたちなり　姫路　小川靜觀堂
草花やめて薯にする庭を堀る　同
考古學ひもとく父の髪白し　岐阜　藤井八路
音一つせず神主の白いひげ　同

入學試驗、入學風景

市議の子の內申受持チト困り　尼崎　小林文月
本箱と同じ値段の靴を買ひ　同
前進〳〵將兵の鬚が伸び　下關　多田二堂
奉公日儲る事は忘れない　同
歷草ふかく吸込めり春の空　大阪　新谷柳風
公園で急に子供が欲しくなり　同
草競馬損をした身に雨が降り　東京　瀨谷蒼美
逆境に蒲團の薄さなど云はず　同
二十貫モンペイはいた尻の巾　長野縣上山田　佐二木千隈
組長に娘があつて寄りがよし　同
母となる頃はづかしさ等忘れ　松江　吉岡笑々
看板の裏をのぞけば蜘蛛が住み　同
嫁き遲れヒスカと思ふ事も有り　大阪　中西彌生
子がなくば娘と思ふ未亡人　同
合格の通知へ父は遲刻する　神戸　潮田晴美
汁粉屋は浪人の名を知つて居る　同
今日も亦休業ですと酒屋の戸　愛媛縣　木村棟友
此の膳を向け替へて見よと筋を立て　同
夏の日に土橋と牛を見て歸り　德島縣　小野秀雄
節句とて配給のある日でもなし　日和佐　同
分捕つた砲で勇士は打ちまくり　大阪　永田六龍子
家庭欄食べられる草たんとあり　大阪　杉浦帆船
月曜の仕事を妻にきめられる　大阪　栃岡詩朗

臺灣山岳風景

聖恩へ同胞といふ熱意みせ　台中　高山武士
感謝する事の多さよ軍事便　大阪　山本葉光
煉炭の穴を數へる病上り　大阪　後藤和坊
孫なれば自慢の梅も叱られず　大阪　山元美翠
湯上りの素足寄道して歸り　大阪　青野花笑
大空へ捨てる私慾の美しさ　大阪　藤森小雅子
竹の子でなくともスフを重ねきて　大阪　保田呆人
わが妻よ長屋の女房となる勿れ　大阪　佐野牛步
子の忠義親め肩味も廣くなり　大牟田　高田抱逸
日曜はガラスにカラー乾して出る　松江　石原詩朗
傷兵に思ひなしかの妓が通り　大阪　永松青雲
春の宵手招く人のある嬉し　島根縣吉田町　伊藤香坊
おぼろ夜の下駄つゝかけて友を追ひ　名古屋　松井靜子
戀なんぞ捨てゝ轉業してしまひ　大阪府　東方鷹丸
電髪の女いら〳〵歩いて來　兵庫縣　勝　草水
踏切で親のなさけをフト感じ　大阪　寺田精二
辨當は花を眞下に見る處　島根縣　石丸順子
叱ソ捨て出來ぬと女房後を追ひ　大阪　左海ヨシコ
發表の公定價では買はれない　廣島縣竹原町　梶川芳郎
よち〳〵と歩けて親の手がかかり　大阪　高田九柳

此犬に依つて匪襲、盜難等が相當防衛されたのであつて其名殘りを今に留めてゐるのである。內地から滿洲に行つた人が最初に驚く事の一つとして此犬等が擧げられるだらう。

友人のS君が、內地に歸つた時、土佐犬の物すごく強さうなのを、連れて來て、日曜となると、とき放したまゝ散步に連れて出る。ところがさすが群を賴む獰猛な滿洲犬も、仲々恐れて側に近寄つて來ない。わずかに遠卷きにして、わん〳〵うなつて居るだけである。將に戰はずして呑む慨があつた。

○

通譯に徐と云ふ男が居た。日本語が大變上手で殆ど日本人と變らない位だつたが、餘りに背が高すぎて、小さい日本人等絕對に此の男に通譯をさせない。一緒に並ぶと餘りにも自分が貧弱に見えるからである。六尺は優にあつた樣である。そんな譯で此徐君仕事が暇で仕方がないので、何時も日本語の勉強をしてゐた。冗談に「そんなに勉強しても君は通譯としては出世しないよ、日本人が皆小さいからなあ」と云ふと「アハヽ、」と朗らかに笑ひながら、相も變らず日本語の本に夢中だつた。(完)

川柳合評 火の見櫓

久米雄＝今回は私が進行係をやらして貰ひます。新しい顏觸れも二三參加されてゐますのでどし〳〵遠慮のないところを批評して頂き度い。では九坡さんどうぞ。

約束の場所でなくなつた飾窓　句主　驛廠堂

九坡＝豪華な流行品から「國債を買ひませう」のスローガンに變つてゐる飾窓。若人の樂しい待ち合はせの場所にはもう相應しくなくなつた飾窓。私はこの句から現在の世相の一端がうかゞへて、特に私の職業の關係からでもありませうが、時局の波に押し流されんとする現代の商人が、認識を新にして立ち上らんとする悲壯な姿がよく表現されてゐる點が深く印象に殘りました。單なる皮肉やユーモアに終つてゐない點に心惹かれます。

山雨樓＝着想は頂戴出來る。飾窓を客觀しその移り變りの一面を捉へてはゐるが、句の調子が如何にもギコチナク且つ弱い口語體の弱點を暴露してゐるとも見られる。

久米雄＝先刻九坡さんの云はれたやうに、飾り窓にも時局を反影して國債をすゝめるやうになつて來てゐるのですから、從つて人の心にも浮つ調子な氣分は消えてゐる筈です。街頭風景にピントを合はして出來た句としてはこの句……何だか少し物足らぬやうな氣がしますが、五健さんどうですか。

五健＝大體云ひ盡して申上げる事もありませんが「場所で」は「ばで」と讀ますのでしようか。こゝに一寸リズムに關する疑問がありますが。「では」と讀みますと次の「なくなつた」が强く呼應する樣ですし、場所でと讀むと緩むのでないかと思はれます。然し見つけ所は確に摑んでゐる句です。

旦那とも呼ばれ中錢奴とも呼ばれ　句主　みづほ

久米雄＝續けて近作柳樽からもう一句提出します。目の前にしては旦那さまと呼び、蔭口ではけちんぼと呼ぶ。兎角蔭へ廻つては惡口を云ひ度いのが凡人のあさましさです。が、そう呼ばれたり呼んだりするとこに人生の喜劇があるし、又それが通俗的な世渡りをしてゐることになるのかも知れません。人生の裏表をまとめた句は數多いに相違ありませんが、この句も亦表現を變へてゐるところに妙味があると思ひます。

五健＝想はあまり新鮮ではないと存じますが戴ける句です。

不水＝みづほ氏は病弱でありながら、句はいつも朗かで諷刺的であるのに敬意を表します。この句も滑稽の內に辛辣さがあります。但し下五の「呼ばれ」は蔭口だから「云はれ」でありたい。

山雨樓＝第一想が陳腐であり且つ淺い。斯う云ふ見方は柳樽の昔から旣にあつたことであらう。近代の川柳はもつと深い鋭いところを狙はねばならぬ。次に表現においても「呼ばれ」を二度使つたのは妙でない。下五は「とも云はれ」とした方が遙に引立つと思ふ。

人妻の挨拶あはれゆきとぞき　句主　丹路

風來子＝私はまだ若い故か、この句がたまらなく好きです。挨拶に拔け目がない穩立派な奧さんに相違ないのでせうが、家庭的な圓滿な主婦といふことに作者は滿足せず、もう一步突き進めて、奧さんの若かりし日の夢や希望に燃えてゐた臟が影を秘めてゐて、あはれを感じたといふ鋭い觀察に敬意を表します「あはれ」といふ言葉を大膽に用ひ、「ゆきとぞき」と轉倒法にしたあたり作者の手腕に感服します。

不水＝「あはれ」と云つたのが氣になるが、これが此の句の生命であり動脈であります。亞鈍氏の丹路論にもある通り、實際この作者は悲し、さびし、侘びし、あはれと云つたものをよく使つてゐる。得て薄つぺらになり勝ちなこの種の句が、丹路氏の腕にかゝると心憎い程重味が出て來る。こせつかず、嫌味のないのは、氏の環境にも依らうが老手たるを疑はない。大體提出者の說明に贊成する。亞鈍氏のメスが欲しい。

五健＝此の句が出てゐる十二月號の丹路さんの分は、ズラリとイ、句ばかりですな。此の句は禪で云ふ「放心」の境から觀たものでせう。あまりイ、句を出さず問題の句を出さんと火の見櫓も手持無沙汰になりそうです。

九坡＝ちよつと手が屆かないなと自分を情なく思ふ程好いなあと思ふ句です。私はこの句をバラ〳〵に解剖していろんなことに觸れるのは、何と云ひますか、この句の持つ美しさを傷けるやうな氣がしますので……然しこの「あはれ」と云ふ言葉の意味をじつと考へてゐると、あるひは私だけの考へかも知れませんが、この句の生命を全部この言葉が表してゐるのぢやないかなとこんな風に思ふのですが……「あはれ」といふ言葉に無限の複雜な意味がこもつてゐると思ひます。この場合の「あはれ」は普通の意味のあはれ即ちあはれを感じたと云ふ樣な意味とは違ふと思ふのです。簡單に云へ

ば一種の詠嘆詞の樣に使はれてゐるのではありますまいか。處女時代の華やかな夢も捨て去つて、今では人の妻としてむつかしい世間のつきあひに慣れて行かねばならぬ。そこに何か一抹の感傷さへうかゞはれて、眞實の人間の姿が美しく描寫されたものと私は考へます。さうでないと、この句の持つ微妙な餘韻が損はれるのでありますまいか。私の解釋が或は作者の意圖にそむいた勝手なものであるかも知れませんが、私はさう云つた意味で、この句の美しい響に打たれます。

久米雄＝皆さんのお說で、我亦何をか云はんやです。次に移りませう。

三角な顏してゐたり十二月　句主　豆秋

山雨樓＝寡作な豆秋氏が句を見せてくれるとなると仲々の佳吟、全くうれしい事である。十二月を材題とした句には鮎美氏の「まごゝろのすりへりたるも十二月」があり、今回の提出には、どちらにしたものかと迷つたのであるが、意を決して豆秋氏の句を選んだ。由來大晦日や十二月の句には佳句が多い。これはせつぱつまつた感じを端的に表はす川柳の題材として好適なからであらうが、この句も亦觀察の態度と角度において端的であり尖銳である。同時に又句を味はふ側としても感覺的、繪畫的なものを受取ることが出來る。その意味で表現が效果的であるとも云へやう。そして自分がこの句により多くの共鳴を覺ゆるものは、作者の腹の底に漂へられてゐる人間味とユーモア感に引付けられるからである。人間の顏が斯く客觀され、しかも斯く美事な截斷が川柳によつて行はれた場合、われ〳〵はわれを忘れて人間本來の姿に限りなき愛着と滑稽とを覺ゆるのである。自分はこの句に多分の文學的價値を認めるものである。

久米雄＝三角な顏は別に三角形の顏ではなく、十二月の氣分から受ける感じが三角であつたと云ふので、感覺的な面白い觀方だと云へます。

九坡＝私はこの句を拜見して言葉の魔術と云ひますか、言葉の持つ魅力をはつきり知りました。例へば「三角な顏」といふ一寸突飛過ぎる樣な表現がこの十二月の句の場合素晴らしい效果を表はしてゐます。十二月といふ月の持つあの切端つまつたやり切れない感じをこんなにも輕妙に、しかも美事に表はされると、つく〳〵作句のむつかしさが感ぜられて、もう何も云はずに默つて作者の手腕に感服するのみです。

五健＝三角な顏……例のカマキリ問題を思ひ出させます。私の長男が五歲頃に描いた馬は脚が六本ありました。走つて居るのが斯う見えたと云ふのです。虛無僧の天蓋姿を見て、アッ挽臼が通る……猿蟹合戰のあのヒキウスです……子供の純眞な眼大人の洗練された眼此の句からはつきつめたものより、一步前に出た大どかなものを感じます。

金貸しの殺されもせず十二月　句主　滿潮

不水＝第一に此の句には隙がない。と同時に此の金貸爺にも隙がない。折あらばぶつ殺してやらうと債務者の方では狙つてゐるに相違ない。第三に句としては文句はないが、氣持の上で何だかまとまりすぎて興が薄いと感じはしないか——なんて勝手な水を入れるのは私だけかも知れない。整ひすぎた男には親しみ難く、隙のない女には戀を語れない。

風來子＝「金貸しが歩いてゐるぞ十二月、柴浪」これが廣島支部の席題で發表されたと同時に川柳塔へ出てゐましたので、面白い對象だと思つて印をつけてゐました。滿潮さんの「殺されもせず」の方は殺してやらうと一度は思ひつめる程一般的に横柄な金貸しの面構へを憎んでゐる。そして自分の共鳴者もあるだらうと想像してみたが……やつぱり殺されるわけのものでないと思ふに及んで、苦しい十二月のどん底に喘ぐ生活を書き出してゐる。次に「歩いてゐるぞ」の句は前の句に比べると自己の苦境を訴へるには迫力が乏しいが、客觀的に又別の味があ

々人の評合

★

前田五健（松山）
福田山雨樓（東京）
櫻川不水（下關）
大森風來子（廣島）
鈴木九坡（岡山）
濱田久米雄（廣島）

るが、中々要心深くて手が下せない。第二に高利貸とせず金貸しとした手際もよく、十二月と投げやつた手法も失敗してゐない。此の句は恐らく誰が選したつて相當の値で買ひ取つてくれる。それは自分には金貸しに關係の有無はさて置き、金貸しが十二月の街を歩いてゐるのを見て、この足取りに、足跡に、貧乏人の追ひすがる悲鳴がつきまとつてゐるやうに感じられる……といふ風に、兩者を睨み合はせて、私には優劣がつかない程いゝ句だと思ふ。

九坡＝冷酷な金貸しに泣かされてゐる十二月はこんな氣持でせうか。私は滿潮氏の句は大抵好きなんですが、この句の場合「殺されもせず」と強く表現された點が一寸氣になるのですが。或はそこに良いところがあるのかも知れませんが。如何でしよう。久米雄さん？

久米雄＝十二月の句がよく出て來ますね。そしてこの句は不水さんの好きそうな句です。所謂荒削りの感があります。この金貸しも相當荒削りの一面があるやうです。山雨樓氏が前に提出された句に對して評せられたやうに、十二月の句にはせつぱつまつた氣分を端的に表はす好材料がうんとあるやうです。ところがこの端的に表はすにしても矢張り咀嚼されなければいけないと思ひます。燃燒された端的な表現が例の「三角な顏」の佳句を生むといふ譯ではないでしようか。そしてこの中七は大分

酷いやうです。「なぐられもせず」では作者の意に反するだらうし、考へものですね。

五健＝「金貸」「殺氣」「十二月」ちと強過ぎる感ですな。それから今の御時勢と云ふ尺度を當てゝ見ますと辛辣を通り過ぎて鼻が痛くなりさうです。然しそこが此の句の生命でありませう。

山雨樓＝殺されもせず、とは餘りに突飛な觀方ではないか、少し極端ではないかと思ふ。或る特別に因業な金貸があつて、惡鬼の如く貧民の吸血をむさぼると云つたやうなものを對照とすれば、斯う云ふ表現も首肯されぬでもないが、只の金貸に對してはこの句は餘りに誇張された感が深くて面白くない。それにこの句の抱く思想には道德的健全性に欠ぐる點も取上げられると思ふ。自分の記憶にある「雨の夜を按摩殺されそうに去に」などは感覺が生きてゐて面白いと思ふのだが。

こゝでこの句と自分の提出した豆秋氏の「三角な顏してゐたり十二月」とならべて批評するのも參考になるであらう。豆秋氏の三角な顏は作者の主觀であり、作者獨自の感覺ではあるが、そこに人間の眞實の姿と象徴的な表現を以つて深く抉り出してゐるのでわれ〳〵はこの句に共鳴しこの句に打たれるのである。即ち作者の表白した主觀を通じて、眞實の姿を客觀し得るのである。一方金貸しの句は同じく作者の主觀ではあるが、單に氣持ちと云ふか、觀念的な見方に止まり眞實に觸れてゐないので、句が浮いてしまつてゐるやうに思ふ。われ〳〵のにはかに共鳴を呼ばない所以である。

久米雄＝ではこの邊で合評を終りたいと存じます。お互に離れてゐるので、寄り合ふといふことは至難なことですから、せめて誌上で圓座を作り、お茶を飲んでゐる氣持で今後も時々こうした機會を作りたいと思ひます。有難う御座いました。

（久米雄整理）

鐵ペンの滴り（ノートへの戯筆）

石崎柳石

☆

發展とは、死んで生きる事なり。

無窮——も亦然り。

☆

絶體矛盾の自己統一——人間は畢竟これを完遂せねばならぬ實在の神秘も亦こゝに在る。

☆

始なく終なきもの、これを具象的に表現すれば、一環の輪である。

普通「和」の形象も亦然からん。

☆

調和——手（Hand）と頭（Head）と心臓（Heart）と。これは彼のペスタロッチーであつた。

「以レ和爲レ貴。无レ忤爲レ宗。」

これは聖德太子の十七條憲法の第一條の冒頭句である。

☆

法隆寺金堂の玉虫厨子の「餓虎捨身の圖」——この一大教理こそ、現實の支那大陸に於て、皇軍勇士の捨身の行に觀る。

☆

西洋倫理——プラトンか、アリストテレスか、お氣に召す儘。だがこゝにも正義に立脚する人間が説かれてゐるはずだが……

☆

生活が哲學を變へる。これが獨乙であり、この獨乙の哲學が變ると、日本の哲學が變る。これが過去の日本の學者の姿であつた。

☆

十八世紀——歴史からの自由
現代——歴史への自由。

☆

長所は直ちに短所である。

☆

日本の教育——日本人が日本人になつて行くこと。こゝに米の本當の味を噛みしめ得る人間が生れる。

☆

孔子は、政治には失敗したが、教育には……これを孔門の十哲が繼承する。

芭蕉も……蕉門十哲への偉大なる教育家であつた。

而して川柳は……？

☆

水も蛇が呑めば毒と化し、牛が飲めば牛乳となる。

川柳の味も亦然からん。

☆

劇場の前に列を作るは貧乏人に多いと——それは懐中の貧困か？ 胸中の貧困か？

☆

風呂敷と手提カバン——日本の文化と西洋の文化。

☆

悟と謂ふ字を分析すればコリヤ吾が心と書くわいな。

☆

冷笑——する者とされる者とに分けられる。が、する者はされる者である。

隨想

小山文三

さる郊外の住宅地に住む若い會社員は今年の三月に入つて新しい門標を盗まれた。

隣り組の常會で門標を掲ぐる事の御觸れが出て急いで木の香新しい新門標に取り替へて掲げたが三日も經たぬ内に又盗まれてしまつたと言ふのである。

同じ様な門標盗みの災厄が少しはなれた隣り組にもあつて、噂は噂を生んだのであつたが、聞けば中等學校入學難の折柄、人の門標を盗む事に因つて容易に入學が出來るとの迷信（？）から受驗學童が往々手近かな門標を盗むで行くのだとの事であつた。

斯くて若い會社員氏は三月中は門標を掲げぬ事に決心したと言ふのである。

さる閨秀作家の〇子の家ではこれに懲りてか、門標の文字の小脇に小さい文字で落第と書き加へて置いたので、其後此門標は盗まれずに四月を迎へたと言ふ事である。

門標盗難除けに落第と書き込む事を考へついた頭腦の良さに感心させられるが又一方此世此時節にこんな迷信が流行するとは全く笑へぬナンセンスであらう。

○

さる金持ちの後家さんは或問屋業を經營して、男勝りの東奔西走を續けてゐるのである。そ

急性・慢性
化膿症

丹毒・癤腫
濕疹・面皰
泡疹・腫脹
外傷化膿
急慢性淋疾
化膿性婦人科疾患
扁桃腺炎
中耳炎
蓄膿症
トラホーム
麥粒腫
齒槽膿瘍

アルバジル錠

●アルバジルは内服により腸からたゞちに血液に吸收され生体深部に於て各種化膿菌を直接殺滅する●故に疾患の根源的治癒を促進し自覺症狀の速に消失する特長あり

包裝 二十錠 五十錠 百錠 藥店に有

製造發賣元 東京・大阪 山之內藥品商會

A 241

して近頃五十錢銀貨をしきりに蒐集してゐるのであつた。

妾は親も兄弟姉妹も子供もない天涯孤獨の身ですから老後のシシババの世話は全く他人の手に倚るの外はない。

その場合に一回毎に五十錢銀貨一枚宛を與れてやる用意に集めてゐるんです。

と言ふのであつた。

凡そ一ヶ月後さる有閑婦人から近頃五十錢銀貨の買溜め(?)が流行つてゐる事を聞かされた。

彼を想ひ之れを聞いて、さては問屋の後家さんも五十錢銀貨の買溜めをやつてゐたのかと、今更ながら自分の迂濶さに苦笑を禁じ得なかつたのである。

由來小さい買溜めは婦人に多い、先高を見越した五十錢銀貨の蒐集なんテ、凡そ俗惡趣味の骨頂であらう。

○

「米と佛」と書いただけでは「コメとホトケ」「かアメリカとフランス」の意味かが判明しないので、漢字必ずしも便利だとは言ひ得ないとの事である。

「少くない」と書いて「スクナイ」のか「スクナク無イ」のかを詮策した男がある。こゝまで來ると假名り交文も不正確だと言ふ事になる。

路郎先生の外來語を扱つた句に、こんなのがある。

スキッチをどう言ひましょう新世帶

これを見ても一概に外來語排斥も首肯出來ぬ事になる。

假名遣ひのむつかしさは申すもがな、俳聖蕪村さへ次の通り奠

川柳仁義 (V)

堀口塊人に告ぐ

高鷲亞鈍

堀口塊人氏が、已が主宰する「昭和川柳」四月號に於て、〃大阪柳界の全國的意義〃なる大阪柳誌總花的一文を草してゐる。それは氣味の惡い位の持上げ方であり、その裏を探ると何か下心があるやうで迂濶には乘れない眉唾ものゝやうに思はれる。

冒頭、日本川柳協會の全國的なる動向に歩調を合して、大阪支部の設立を語り、その支部たるや、事務的に見れば大阪は地方の一府縣にすぎないが、川柳的に見れば全國の中心地であり、しかも量的にも質的にも全國柳界の指導的立場にあると大きく出て、「川柳雜誌」「番傘」「川柳春秋」「天守閣」「赤煉瓦」「つるはし」「昭和川柳」の各柳誌の特色(?)を最大級に賞めあげてから、斯くの如く、大阪に於ける各柳誌の動向は常に全國的意義を有し、單に一地方的事情のみでは、左右し得ない狀態である。だから國策の下には如何なる統制にも服するが、經濟的實力についても全國に冠たる、しかも全國的なる數誌をもつた大阪と、一地方一柳誌すら有しない地方と同一視せず、その中心地たる大阪の柳誌統合問題については、常に俳向短歌等の同一の取扱ひが望ましい事であると結んでゐる。

以上塊人氏の一文は、日本川柳協會に端を發し、大阪柳誌統合問題で結論し、この二つの柳界の政治的心構をもつて各柳誌の全國的意義を主題にしたもゝ如くである。この日本川柳協會、及び統合問題に就ては、目下具體的な發表をする時期でなく、殊に統合問題は、大阪各柳誌の主幹の申し合せにより、一切の發表は控へる事になつてゐるので、讀者にその詳細を此處で語る事の出來ないのは遺憾である。要するに塊人のこの一文は眞正面に讀めば、大阪以外の川柳の雜誌を持つ地方の柳界人に對して甚だお氣毒な言葉であり、大阪に住む吾々としても、一寸恥しくてどうにも挨拶のしやうがないのである。「天守閣」が一デパートの店員達の親睦的意義があるとし、「つるはし」を町内會的特色があると仰言り、二、三人で小つちやな柳誌を出してゐる「赤煉瓦」を新興の意氣旺と提灯を持ち、それらも含めて、經濟的にも全國に冠たり、全國的意義があるとは、どうも少し心臟が厚すぎるやうに思はれる。僕など、川柳の雜誌は「川柳雜誌」以外に大阪は勿論、日本國中(つまり世界中にも)に一つも無いと思ひもし、知りもしないといふのは、些か僕自身の不勉强のせいかとも考へられるが、まあ〳〵、大阪でも、全國的意義のある雜誌は正直にみて、一つか二つ位の事ぢやないか。それなら、地方の方も納得できる公平なものぢやないかと思ふ。それから日本川柳協會大阪支部の場合、全國的な動向と歩調を合してゐる樣を、さもイソ〳〵と嬉しさうに語つてゐるが、量、質共に全國の中心地であり、經濟的にも全國に冠たる柳誌を持つ大阪の川柳界が假令、事務的にしろ、東京本部の指令を何故仰がねばならぬか、これも可笑しい。塊人にして、それ程自信もあり、矜持を持つなら、何故大阪に於てこそ、事務的に日本川柳協會本部を創らないのか、手取早く言へば、既に麻生路郎氏が、數年前今日あるを豫測して——かどうかは知らないが、その名も、川柳人協會を創立し、全國的柳人の組織を持つた事を御存知なきや。柳界の中心が大阪にあると信ずるなら、此の聖賢文化組織に既存の川柳人協會を發展解消せしめ

じてゐる。

うめをきぬ　どれがうめやら　むめぢややら

國語改造問題もこゝまで來ては尙更むつかしい。

○

我子の出征を見送る爲めにさる港まで初めて汽車に乘つた山奥の老媼が其田舍の驛から十一ケ驛目で乘り替へる事を懇々敎へられたのであつた。

氣轉の利いた媼さんは袂の中へ十一ケの丸るめた紙團子を入れて置いて、汽車の一驛に着く毎に此紙團子を一つ宛捨てゝ、殘りの紙團子が一つになつた頃に乘り換への仕度に取りかゝる趣向はさすがに年齡の効を感心

合本

「川柳雜誌」十七卷の合本が出來てゐます。大型の上製で背にはSENRYU ZASSHI VOL. XVIIの文字が美しく輝いてゐます。あなたの書棚に一冊如何です。尤も僅の部數しかありませんから御希望の方は大至急御註文下さい。（一冊前金四圓三〇錢送料三〇錢）「川柳雜誌菊版時代の合本では三卷、四卷、五卷、六卷、七卷、八卷、九卷、十卷、十二卷、十三卷、十四卷があります。（定價各三圓、送料三〇錢）振替大阪七五〇五〇（川柳雜誌社）を利用して下さい。

させられた。

春の汽車は暖かい。汽車のヒーターも心地よくて袂の紙團子の半分位殘つた頃から、うつかり居眠つて、乘り換へ間際にまでの日本川柳協會を大阪に打ち建てる可く、努力を何故しなかつたか、塊人も川柳人協會の名譽會員であるなら、それを先づ最初に考へて然るべきであつた。東京の雀郎や、三太郎等の本部の指令を難有がつて受けねばならない大阪の川柳人の間抜けさ加減に愛想が盡きるのは路郎氏ばかりではありませんぞ。

さて、塊人が「川柳雜誌」に對する全國的意義と稱する件に就て少々文句があるから、左に一應彼の原文を引用して置く。

――職業の川柳家をもつて任ずる麻生路郎氏を主幹とする「川柳雜誌」はその異色ある編輯ぶりをもつて知られて居る。主幹が職業川柳家である事は、必ずしも川柳そのものゝ質的向上を意味するものではない。生活の爲の廣告主、生活の爲の後援者に對する氣兼等によつて、文學的には反つて墮落する場合すらあり得ると思ふ。然るに路郎氏はこの至難に、よく善處せられ、職業川柳家として質的向上に努力せられて居るのは敬服にたへない。たゞ、自らの節操を守るに、急にして他社と融和を缺く場合のあるのは甚だ遺憾である。この上は一川柳社としてのみならず、全柳界の爲にも、その力を添へていたゞきたいものである。それがより人物の大を成す所以であらう。――

嘗ては喧嘩して別れた岸本水府の人格とその「番傘」にベンチヤラをしやダンチックな森雞牛子と本田溪花坊とその「川柳春秋」を大阪の誇りとまで、人間きの惡いまで高く買ふ塊人は麻生路郎と、その「川柳雜誌」にのみ、柄にもない注告めいた言草は如何にも片腹痛い。それが眞にツボのはまつた注告なら、路郎たらずとも大いに反省もし、そのアドバイザーに對し感謝の言葉も出やうが、あれでは却つて、塊人の大家でもない大家顏を生意氣に見せかけてゐる風で、又路郎氏が誤解を受けることであり、迷惑千萬でもある。路郎師は昨今、斯ういつた誤解は大悟してしまつてゐて、抹殺せられてゐるが、僕が側近に居る者の一人として辯明でなく、塊人及び塊人同樣に誤解する小兒病患者的ヒガミ屋の蒙を拓いてやるのである。

即ち塊人流の解釋によると、職業川柳家である事は、川柳の質的向上を意味するものではない。それは生活のための廣告主、生活の爲の後援者に對する氣兼ねから、文學的に墮落する場合もあり得る。然るに路郎氏は、職業川柳家として質的向上に努力せられてゐるのは敬服にたへない。といふのである。當り前の話である。敬服するもせぬも、路郎氏が職業川柳人になつて墮落すれば寧ろ不思議であり、もと〳〵柳界の墮落を革進し掃蕩する爲に、雄々しくも日本に（世界に）唯一人敢然と川柳職業人を宣言したのである。川柳職業人を玄人と見、でないものは一切素人とみた場合、双葉山が墮落すれば角力取も横綱もオヂヤンだし、將棋の木村名人が墮落しても、アカンやうに、一旦その道の職業人（專問家、生活者）路郎氏が墮落でもしたら、川柳では絶對に生きてゆけない、眞劍なものがある事を知る可きである。（精しくは、先年六月號拙稿「柳壇の頂點に立つ人」參照）塊人の如く、別に會社員といふサラリーマンのやる川柳だつたら、「昭和川柳」が、「番傘」を飛び出して以來の意氣込みもどこへやら、〇〇川柳やら、〇〇川柳やら、それから生活川柳がどうしたのか忘れてしまつて、「龍」や「赤煉瓦」の愛想つかしを受ける程無節操でもあり、不仕鱈でもあり、明かに川柳道の墮落で、それでも晝日中大きな顏をして歩きもし、書きも出來るのである。それが素人故に通りもするのだ。尙廣告主や後援者の氣兼ねから文學が墮落する場合もあるといふ、懸念も亦全然ない事も御承知願ひたい。川柳職業人は、川柳に熱心でさへあれば氣兼ねも、へつたくれもないのである。双葉山は角力に熱心であり、强くさへあれば、後援者にも協會にも氣兼ねする必要は全然ない。後援者が墮落させるのではない。墮落させる後援者は本當の後援者ではないからである。そこで廣告主の氣兼ねといふことだが、それは川柳職業人にとつては、やはり氣兼ねも糞もないわけだ。作家、横光利一や、山本有三が仁丹の廣告に氣兼ねして、小說を書きますかね。それから彼らの文學と仁丹とどんな關係がありますかね。たゞ路郎氏の場合、川柳職業人であり、且つ營業雜誌である「川柳雜誌」の、經營者であるといふ兩方を一つの身に持つ混同さから塊人が、たま〳〵生活の爲の廣告主に對する氣兼ねと言つたとすれば、少しは判らんでもない。然し川柳の雜誌で、「川柳雜誌」以外の營業雜誌も亦これ全國に（世界に）一冊も無いのに、墮落する場合もあり得るといつた比較も、例も成り立ちはしないではないか。

而も、雜誌經營者として、雜

ごついたと言ふ事である。
百の計畫よりも一つの實行を尊ぶとはこんなのを言ふのであらう。
昭一六―四―一〇稿

役所の窓から

大森風來子

都會では數少い公園の樹々が、もしくはアスハルトに沿ふた銀杏とか、鈴懸とかの並木が、その青葉を廛埃の中に開いてゐるが、五六日雨でも降らないと、目にも見えない白つぽい色をその葉おもてにたゝへてしまふ。

私は清い空氣に惠まれた田舍に育ち、人の手入れさへ受けることもなく、自由にその枝を張り、その葉を豊かに盛り上げた藁屋根を圍んでゐる中で成育して來たので、事變と同時に召集され、補充兵としてしばらく教育は受けたが、間もなく渡支して一番に感じたことは、内地の風景がどんなに鮮細で、四季のとり〴〵の美しい色彩を持つてゐるかといふことを……重い背嚢をおひながら何十日も同じ畑を、同じやうな部落を通り抜けながらも、敵彈の見舞を受けて遮ぎる何物もない大地へ伏して草の實をかじりながらも、〇〇山脈をよぢのぼる時も、白衣の歸還の車窓からも……絶えず思ひつづけて來た。

誌の體裁、宣傳、覆行等考慮に入れる事は、その經營の收入の大部分を占める廣告主に對する思惑をするのは當然である。だからと言つて、「文藝春秋」や「改造」や「主婦の友」の執筆者が墮落する等は考へられないし、從つて雜誌そのものゝ内容が墮落する事もあり得ない。廣告など入れたら雜誌の品が落ちる位にしか考へない、ポケット・マネーを出し合つて出す坊ちやん連中の同人雜誌みたいなものと同列に論じて貰ひたくない所以である。大體さういふ思考のもとに塊人が餘計な心配をしてゐるとすれば、それが小兒病的と言ふのである。

次に自らの節操を守るに急にして他社との融和を缺くのは遺憾だ。よろしく一川柳社としてのみならず、全川柳界の爲にも、その力を添へられよ、それがよい人物の大をなす所以であらう。とは何事であるか、路郎氏が自らの節操を守るに急であつたなら、何故川柳人協會を創つたか。師走川柳大會を、朝日新聞社で開催し、周魚や、紋太や、御身らにまで辭を退くして講演依頼したのも川柳人協會理事長としての麻生路郎でなかつたか、理のわからぬ節操とか申すなら、その當時、「番傘」の連中が、こちらの懇望を退けて、大會に參加しなかつた事を取上げて欲しい。逆に路郎氏は「番傘」の中央公會堂の大會には參加し、小は「昭和川柳」のある月の句會にまで路郎氏は出席したことがあるではないか。或ひは久良伎の還暦祝の勞をとつたり、他社の融和、柳界の親睦は凡てこれ、卒先してゐるのである。たま〳〵日本川柳協會大阪支部設立に當り、路郎一門が未だ參加しない故をもつて、他社と融和を缺くといふなら、それ相當の根據と理由がありてのことである。今はそれを精しく公開できないがその路郎氏の肚は、塊人も個人的に逢つてよく知つてゐる筈である。川柳人協會員や、「川柳雜誌」の不朽洞會員中にも、塊人や塊人ぐらい以上の柳歷を持ち、もつと見識達見豊かな川柳家も澤山居ることである。その邊のベラ〳〵の雜誌を持つて、一國一城の主みたいな顔をしてゐる連中の寄合に、又それらと同じやうにおいそれと輕々しく參加出來ない路郎氏の立場も、とつくり考へてみる可きであらう。人物の大をなす所以とは、明かに塊人の失言として咎める可きである。なつてゐない。物事はもつと考へて言ふ可し。

最後に、下手な政治的工作を柳界に於て、爲す可からず。塊人よ、御身の一文は結局、爲政者當局への歎願であつたらうが、よく身をわきまへ、周圍を知つて、行動されよ。惜しむ可し、御身の悧巧さを眞に川柳を生活する人のために盡さざるを悲しむものなり。

初對面

蛭子省二

「川柳百人一句」第三編がつく。これを以て終編とするとあつたのには大に驚いた。恐らく奇特な宮尾しげを畫伯が、川柳壇への終生の奉仕として下さるとのみ思つてゐたからだ。どうも未だ續篇が出るような氣がしてならぬ。

明治時代からの川柳人を、悉く首實檢するといふが如きは、何人もが企圖し得らるゝわけ合ひのものでない。君は大旅行家であつて、日本滿洲支那に畫材を探索される足を、わざ〳〵延ばし、時間を惜まず、自稱川柳人と膝を交えスケッチせられる不斷の根氣は、好きな道であればこそ並大抵な業ではない。明朗にして溫厚な性格者である上に、蒐集癖を有さるゝが故に、始めてよくし得た三册の成果であり、且物質上の事をも思へば、寔に感謝にたへぬ。若し初對面の印象を、一々詳かに聽くを得たならば、それは全川柳壇の裏面史ともなつて、興味津々たるものがあらうと考へる。

私は昨夏の旅行で、かなり多くのお方々に初對面をした。なかには五年十年以上も文信して居る間柄もあつて、而して察知して居る處と全く異なる風格を見出し、交際は是非一度は相會し胸襟を開く事に於て、愈々妙趣あるを味はつた。さうしてみると、ある意味では、第一印象がある定度、參考となつて附き纏ふものともならう。私は九貫許りの倭軀、生來容貌醜惡、老來胡麻鹽頭——顏、物腰による一生の損得は、豈に政治家のみならんやで、所謂一見人に好かれる姿態の持主でない事を自知するから、進んで餘り他を訪問せず遠慮する。尙且つ病疾あり、病褥に橫はる折は事情を具陳し、初對面丈けは謝絕せんと心掛けつゝも、實際にはさうもなり難く、數ヶ月惱み衰弱困憊の極にありし時、初對面をした川柳家が數氏ある。これ程第一印象の最惡な場面もなからうから、その悉くが川柳緣の薄いものとなつてしまつたのは無理からぬ事、最早拂拭し得ない感情で、憫まれざる自分の境遇を哀れみ苦笑するのみだ。だから旅行中に初對面をなし得るのは、誰引のない自己暴露であり、買つて頂くにも心易い。

先年畫伯がお役所の依囑にて南朝鮮の白羊山探勝に一行で來られたことがある。これが私が接近し得た最短距離で、白羊山には一度行つてみたいと思つてゐたから好機會であつたが、やはり病中であり到底十數時間の乘物により、初對面に出掛け得べくもなかつた。然し私は明治大正、昭和と生を享けたので、多摩御陵には參拜致さねばならぬと、深く心に念じて居たから、必ず東京で握手し得ると信じてゐた事が達せられ、君の前に膝掛けさせられ——私には初對面の氣はしなかつた——三編の末席(末尾から二人目)に列する光榮を擔つた。其上御同情によりエビス顏に描かれ以て多くの川柳人と初對面をなし、川柳緣を結び得る願望に充されて居る。

「川柳百人一句」は自選句集を兼ねる。自稱川柳人の赤裸な團欒である。だから風呂を浴びて居る人、浴衣で腕卷くりをして居る人、德利盞を列べて居る人、千姿萬態に描かれてもある。年齡柳歷等々の記載はあるが、それらの事情を放棄し有名無名の差別もない。此册子を通しての第一印象が、互に單なる毛嫌ひに陷つてはならぬ。遠隔の地に住むからは、これ程善き詩交への仲介機關はないのだから。

「旅て家で」其の四

映畫「藝道一代男」漫評

奉天 吉田水車

「鳩治郎紙治となつて光るなり」

何にしてもよき芝居に緣の遠い私にとつては正直の所やはり劇中劇「河庄」に一番期待を持つて觀た。しかし此映畫の本筋はそんな所にないのは勿論である。通じて低調(演技的)なのはうらみであつたが場面の動きの尠いのにもかゝわらず飽きさせなかつたのは演出者の手柄でもあり、演技者のすぐれた點である。豪華なセットと行屆いた考證の効果も見逃せなかつた。詳しく言へば叢助の好演も年齡的に扇雀の扮する鳩治郎の父としての助けにはならないと思つた。扇雀の鳩治郎に迫力のないのはキズであるが、前記のやうに「河庄」ですつかり氣をよくした私である。芳子の舞台度胸ならぬカメラ度胸には感心した。常時親しんで居る積もあらうが京都辯のうまさは他を壓して居た、梅村蓉子は後半母となつてからの方がよかつた。

(一六・三・一三記)

お時間の少ない方には最も便利で
直ぐお役に立つ

職業洋裁自由教室

(大阪市南區鰻谷西ノ町十)

教授 は山中吉子先生のグアレンタインシステムで御指導

教材 は初歩の方は御持參の事、但し新しい生地でなくとも結構、研究の足りた御上手な方にはブールブーの店から教材をお渡しいたします。又相當の報酬も差上げます。

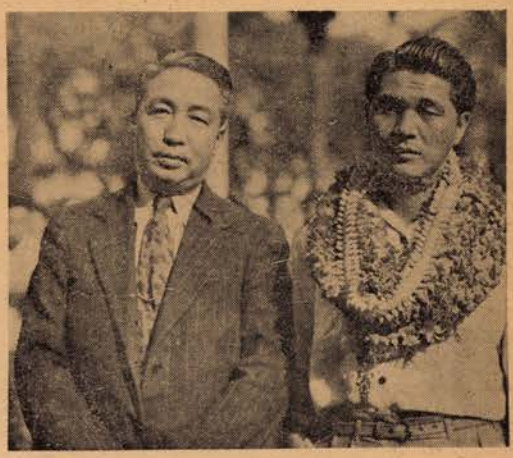
卒業 は6ケ月(60回以上出席の方には美麗な卒業證書を贈呈)

教授料 は月謝制と切符制の二種

申込・出席券 其他御問合せは下記へ

ブールブー洋裝店

大阪市南區心齋橋一丁目四四
そごう北橫



二世の入營

布哇では米國の第二回選拔徴兵で、三月廿四、廿五の兩日に七百人の壯丁がスコーフィルド兵營へ入營する事となつた。そして前山北海氏（不朽洞會員・川柳人協會員）の義弟清地乙作氏と長谷川猿吉氏（川柳人協會員）の三男で五尺七寸十七貫の堂々たる體格の佐武郎氏が七百人中の二人となつて勇躍入營したさうである。ペペケオの猿吉氏はわざ〳〵二十日にホノルルに出府され愛兒の入營について激勵された。

（上）北海氏と義弟（下）猿吉氏と愛息——共にイオラン改廻前にて撮影

★

これ等の通信に接すると、在外同胞の立場なるものについて深い同情を禁じ得ないものがある。——と同時に内地在住の人々の幸福を思ひ、愈々臣道實踐の實を擧げ和戰共に、愛國の至誠をさゝげつくさねば相濟まぬ譯である。遙に海外同胞並に第二世の心境を思ふ時、日米若し戰はば——

その結果はおして知るべきではあるまいか。その昔、戰國時代に父と子が敵味方に分れた例はすくなくないが、現世に於て、しかも國を異にして、戰禍に直面することは想像以上の苦腦であらう。しかし運命の神は決して君たち第二世を不幸にはしないであらう。

遙に健康を祈る。

在外に在る同胞に

著の國刺身の國を忘るるな

路郎

川協の★★ページ

★帆傘川柳社（高知）では帆傘創刊十周年記念川柳大會を五月十日正午から高知新聞社講堂に於て開催、なほ午後六時から鷹城旅館に於て懇談會を開く由。

★川柳忠臣藏の著者、古川風竹氏（布哇）は三月十四日、ヌアヌ基青會館で淺野内匠頭の命日を期し「義士を語る夕」を開催、出席者も恰度十四名となり、追憶に耽る一夜を過ごされた由、なほこれを機會に毎年二回（三月十二月）義士を語る夕を催されることゝなつた。

★藤井友郎氏（不朽洞會員）の令弟が舊冬、北支で名譽の戰死をされたので、嚴父から盛大な葬儀の模様を在布哇の友郎氏に報ぜられたところによると、鄉里は福井縣の片田舍であるが、縣知事を始め三千人の會葬者で嚴肅な葬儀が執行され四十團體代表者によつて弔辭が述べられた光榮に謝辭を述べる嚴父は感極まつて聲をあげて泣かれたとのことである。友郎氏は布哇にある自分の身替りに三人の令弟が出征され國家のお役に立つてゐられたのである。

★麻生路郎氏は阪急產業報國會機關誌「阪急」の阪急柳壇の選を擔當される事となつた。

★大京都川柳社（京都）から、合同後の「川柳月刊」四月號が出た同人の熱意も感じられるし、雜誌らしい形態をそなへたことを欣ぶ。今後の發展を祈る。

★朝鮮川柳協會機關誌「川柳朝

一路集

募集句

教科書

正光選

教科書にあつたとだけは覺えてゐる　九坡
執着に小僧教科書より捨てず　同
全快を待つ教科書は枕元　一龜
一通り母教科書へ目を通し　同
獨學の友に教科書貸してやる　巳之介
教科書の文意に赤い線を引き　九柳
教科書へ辨當箱の汁のあと　耕水
教科書へ抱負が燃えて新學期　ユリエ
教科書を離れて窓の春を追ひ　同
新しい教科書を繰る春の風　眞理子
叱られて教科書そらで讀んでゐる　抱逸
病んでゐる子に教科書を讀まされる　葉光
教科書が嬉しく屆く宣撫班　同
教科書が欲しい少年工の矚　斗風
教科書を揃へて呉れる姉が好き　千斗
教科書へ押花をして見せ歩き　同
算術の本から先へ汚して來　東狂子
心理學僕の心理とちと異ひ　ヒデオ
教科書を開けば友が誘ひに來　灯竿
教科書の間へ手紙忘れられ　同
教科書の漢字に母もちと困り　小雅子
教科書が山程積まれ試驗前　矚美
長男の教科書讀めぬ字が多く　愛鳩
教科書を脫線すれば名講義　石鹿
（佳）世渡りの道教科書の外にあり　みづほ
（佳）教科書を拜んで開く尋常科　同
（佳）教科書の繪にある樣な母と知る　九柳
（佳）三男に生れ教科書皆古く　惡源太

鮮」改題第一號(四月號)が偉容を見せた。一層の發展を期待する。

★鶴はし川柳社(大阪)では三月十六日發行の「鶴はし」通卷第四〇號を以て終刊號とし同時に社を解散した。

★「川柳草雉」(名古屋)は第八十六號四月號を以て終刊號とし、草雉川柳社を解消、日本川柳協會愛知支部の機關誌として再出發をする由。

★宮武如蛙翁喜の字祝賀川柳大會が濤明、三禍、月南、三華、梅嶺、新生、一醉、日出美、佛心、佳唱、夢詩朗、啞三味氏等の肝煎りで五月四日午後一時から大連市豪山屯の神農園暢心館で開催される。

★池田可宵氏(仁川)は朝鮮川柳協會の常任幹事兼仁川支部長とならられた由。

新會員を募る

松坂倶樂部　川柳講座

▼新體制下の常識として川柳を知りたい人▼趣味として川柳を創作したい人▼從來作つてはゐるが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々は▼松坂屋(日本橋筋三)の七階にある松坂倶樂部の藤生路郎川柳講座へ入會されたい。講座は月二回、第一、第三日曜日午後一時から開講。(作句・添削批評講義等)會費一ヶ月金壹圓。入會希望者は七階の倶樂部受付へ申込まれたい。(川柳講座幹事)

★「川柳伊豫」の五月號は海の特輯號として刊行し、海の兵隊さんに捧げる。

★川柳きやり吟社(東京)では同社の山川花戀坊氏の編輯で故八十島勇魚の句集を刊行した。四六版、一六七頁(非賣品)柳友後進の手で故人の句集が刊行されることは嬉しい。發行所は東京市豊島區高田本町二ノ一四六七

★ふあうすと川柳社(神戸)ではふあうすと推薦句集を刊行した菊半截七七頁、五十錢、發行所は花隈町四七八

★川柳人協會サービス部曰く

雜誌の散逸をふせぐために合本をしたいノ\と思ひながら積み上げてゐる人達のため製本の勞をとります。御希望の方は下記へお知らせ下さい。大阪市西區江戸堀上通二丁目四六昭和ビル二〇一號室川柳人協會(電話土佐堀八一六三)

(佳)　教科書へ遊び足らない顏二つ　博行
(佳)　教科書の香春を告げてゐる　風來子
(人)　教科書を持つて級友見舞に來　美奈子
(地)　遞信リーターをまだ教へ　東狂子
(天)　教科書に樂書があり子は達者　牛歩

選後に

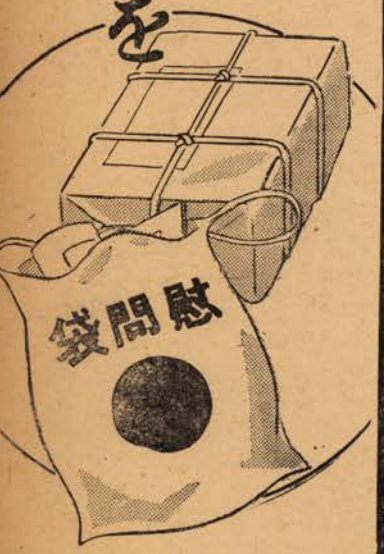
課題が「教科書」なのだからほんとうの教科書を詠むことは尤もな話ではあるが、教科書といふ文字が使はれて居ても、主人公は教科書でない方に、つまり教科書は道具や背景に過ぎない句が大部分なのから考へても、教科書に凝らへた人生の種々相が詠まれてもよいと、私は思つてゐる。卽ち課題は課題を詠込むことが本意として出頭されるのではなく佳い句を得る手があり、又はヒントとして出頭されるのであるから、離れ過ぎても困るがもつと自由に伸々と聯想した方が、句作の勉强としては有效である。

(軸)　教科書に載る川柳へ腹を立て

共稼ぎ　文庫選

共稼ぎして大根の値も覺え　六龍子
托兒所で子が育つてる共稼ぎ　ユリエ
一つ宛鍵を持つてる共稼ぎ　眞理子
共稼ぎ今日の出來事話し合ひ　みづほ
共稼ぎ驛で別れて驛で待ち　勝二
國債のたまる嬉しさ共稼ぎ　小城子
月給が一日違ふ共稼ぎ　じゆん
共稼ぎして帳尻が未だ合らず　同
常會も交替で來る共稼ぎ　彌生
公休を派手に出て行く共稼ぎ　同
笑はせる人氣稼業の共稼ぎ　詩朗
包紙のまゝ膳にのる共稼ぎ　美奈子
共稼ぎ隣の人をよく使ひ　牛歩
リヤカーに妻を勞はる野良歸り　芳泉
共稼ぎ七日分程買つて置き　同
共稼ぎ日の丸丈けは揚げておき　抱逸
共稼ぎいつもの辻で別になり　平人
かくなれば外に術はない共稼ぎ　約多呂
會社ではあなたと呼べぬ共稼ぎ　美弘
共稼ぎ餘裕が出來て愚痴も減り　一秋
さればとて辭めるに惜しい共稼ぎ　十四之
共稼・勝氣な妻にひきづられ　斗風
花も見ずそれで樂しい共稼ぎ　石鹿
公休がまるきり違ふ共稼ぎ　鶴醒
ミシン踏む妻へ子を抱く日曜日　千斗
共稼ぎ妻も中々我が强し　進一路
浪曲師三味は矢つ張り妻がよい　迷路
共稼ぎ一軒借りて母を呼び　九柳
共稼ぎ回覽板は夜分來る　同
共稼ぎ親類なんか頼らぬ氣　晴美
反對の電車に乘つた共稼ぎ　神樂
共稼ぎする氣になつた請求書　數馬
(軸)　共稼ぎ錠で固めて家を出る　文庫

高須啞三味先生の選「靴」の選稿が本號編輯締切までに未着につき次號で發表することにした。(編輯局)

戰線の將士へ
臼衣の勇士へ
慰問品を


慰問品賣場　一階
實用向百貨店
松坂屋
大阪・日本橋

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿規定

▼用紙は原稿用紙
▼文字を正確明瞭に
▼開催月日及場所記入
▼締切は毎月廿五日
▲投稿先は本社宛

本社四月例會

四月五日　於　御津八幡宮

出席者(順不同)
路郎・彌生・青雲・滿潮・翠光・恒明・花笑・紫香・籌彦・玲之介・かほる・麥秋・帆船・要兒・紅多呂・潮花・綠雨・美奈子・丹路・桃園・綠風・九一・文雄・重一・和郎・八櫻・寄與史・豆秋・平行・一鉢・某人・銃人・亞鈍・虻蜂・指洋・正路・富士・八九滿・小松園・一笑・白柳子・顯・鼓愁・大研子・アート・葭乃

席題「トンブク」　互選

トンブクを飲んで布團の重さ知り　麥秋
トンブクを呑まずこちらも口を開け　滿潮
うどん屋のトンブクでよし僕の風邪　帆船
トンブクを買ひにやらした旅の宿　紫香
トンブクで濟ますランプの灯が暗らし　潮花

席題「空箱」　綠雨選

空箱の一つひとつに入れるもの　一笑
空箱へ上がり見送りの禮を云ひ　かほる
空箱を二つ重ねて手が屆き　紫香
空箱へ人形寢かす女の子　籌彦
空箱と見へぬ本だな出來上り　美奈子
空箱も油斷にならぬ金の高　翠光
空箱に玩具が殘るまゝに逝き　亞鈍
空箱を踏台にして釘を打ち　豆秋
空箱をつぶして地圖を書いてやり　紅多呂

席題「牛」　豆秋選

大阪に住めば牛までやせてゐる　一笑
牛に似て牛のあだ名に親しまれ　丹路
何も彼も知つて居そうな牛の顏　要兒
水牛の今日日本の荷を運び　銃人
つながれた牛に正午の陽があたり　綠雨
ビフテキにして美味そうな牛が來る　平行
赤襌牛にも留守を云うて征き　富士
牛が居て路が通れぬハイキング　籌彦
默々と曳いてる牛に教へられ　寄與史
匂ひかぐように小牛の草をくひ　桃園
牛曳いて戻る息子の頬かむり　潮花
默々と來て默々と牛かへり　紫香
晝飯を知つてか牛は顏を向け　かほる
牛小屋へ歸還の靴のまゝで來る　某人
牛も亦代用食をあてがはれ　豆秋

席題「泡」　某人選

近頃のラムネの泡が呆氣ない　紅多呂
待たされて鰌の泡を見てゐたり　滿潮
一瞬でよし泡沫の眞白なる　玲之介
蟹はまだ考へてゐる泡を吹き　同
蟹の泡子とゐる砂の溫かさ　潮花
健康美シヤボンの泡が背を傳ひ　紫香
シヤボン玉七つの色でこわれたり　一笑
しやぼん玉チルチルミチルの國へゆこ　亞鈍
水泳の選手を泡が追ひかける　彌生
悠々と泡は目高をやりすごし　葭乃
春の愁ひは小さな泡のたつ思ひ　亞鈍
海女は今五錢見つけた泡を立て　玲之介
泡一つ蛙の鼻の先で消え　某人

席題「櫻」　丹路選

葉櫻の下にぼんぼんほつとかれ　富士
一本の櫻に母は陽なたぼこ　綠雨
直新な學生帽が櫻へ來　亞鈍
孝行の花見は人と離れゐて　九一
山櫻史蹟のひるを晉もなく　某人
咲けば散る大和櫻に戀もなし　綠風
慰問又櫻を入れた封を閉じ　籌彦
櫻咲く便りを雪の中で讀む　恒明
櫻々國民學校の庭に咲く　八九滿
二遍目の櫻が咲いた移民村　文雄
人間の列が櫻になかめられ　虻蜂
重傷の擔架は櫻浴びて行き　玲之介
櫻咲く下で娘の氣が揃ひ　小松園
櫻もう葉ばかりとなりまだ蕾えず　要兒
算盤が合はず櫻も見に行けず　紅多呂
野にあればこそ葉櫻が親しめる　虻蜂
夕櫻夢のなかなるつぶらな瞳　潮花
櫻ひら〳〵サラリーを考へず　滿潮
櫻散る散る風をとつてゐる　豆秋
傳說の櫻哀れに花を附け　帆船
陳情のついでにさくら見てもどり　豆秋
ビールでもよいがと思ふ花吹雪　一笑
貧しさを忘れさせたる櫻なり　八九滿
病人に櫻の名所教へられ　寄與史
血のにじむ土に櫻の咲き揃ひ　桃園

持ざる國の櫻滿開　滿潮
咲き匂ふ櫻白衣の瞳がきれい　翠光
兼題「洋館」　路郎選
六階でうどんを一つ電話する　豆秋
洋館の額は總裁筆のもの　白柳子
浮草の又洋館を引き拂ひ　豆秋
若き日の夢洋館を抱いて寢る　玲之介
洋館の窓におむつも面白し　寄與史
洋館の主は祇園の人と聞く　要兒
洋館の蔦を這はして古くなり　かほる
洋館もチョッピリついてゐる貸家　一笑
洋館は罰金刑にまだ懲りず　滿潮
猛犬に御注意洋館そびえたち　丹路
洋館の此處まで掬摸を追ひ詰めて　滿潮
洋館と變つて居たり村役場　帆船
洋館の窓にドテラのあくび見え　麥秋
洋館を白足袋はいた親旦那　亞鈍
洋館へ三味線懸けるとこが無い　豆秋
洋館の横チッポケな交番所　美奈子
洋館で外の風速眺めて居　綠雨
洋館はつぎ足しをする姿なり　帆船
歸化人の西洋館に鯉が吹き　一鉢
洋館へある日松かさ轉げ込み　某人
サーベルの音洋館を寒うぬけ　潮花
洋館を何時もバックにして寫し　紅多呂
洋館を引摺つてゐるアドバルン　虻蜂
洋館の跡だゝ廣く荒れてゐる　文雄
洋館は銀行だけの驛に着き　平行
防空に洋館すこし認められ　九一
ハリボテの洋館に住むママを呼び　美知夫
洋館へ紋付で來てゆすりめき　某人
洋館へ下駄履いて來た事を悔ひ　帆船
大使館明日引揚げの灯が點り　銑人
洋館はいばらの垣へ遠く建ち　馥乃
洋館へ三階建も少さくなり　彌生
洋館が人間の容姿變へさせる　青雲
洋館へタワーの欲しいよい月夜　馥乃
洋館は今賣出しの小說家　滿潮
洋館に母の部屋だけ日本間　美奈子
洋館を背負つて座る靴直し　彌生

川雜 廣島支部句會 （廣島）

三月二十八日　廣鐵倶樂部

大森風來子報

道連れの欲しい一本道へ出る　笛六
口答へするなと親の方が負け　金十
辯解は聞いておれない忙しさ　秋無草
冷やかに笑ひ辯解ついにせず　俗菩薩
辯解のすら〳〵言へてさげすまれ　天國
辯解の通らぬわけを一人知り　風來子
夕刊に去年の事故を思ひ出し　たかし
運轉手夢見が惡かつたと話し　久米雄
入場無料長蛇の列が滿ちあふれ　伯峯
辨當箱母の慈愛のあふれたり　久米雄

川雜 松江支部句會 （松江）

三月十二日夜　於 恩敬寺

勝谷山川兒報

週報に知る日本の進む路　湖雪
春風にモンペの裾をかるく締め　專太郎
週報の發行傳へてニュースすみ　詩朗
我家はよし春風へ寢ころがる　靜朗
週報も廻つて來ます隣組　戀紅子
春風へ作戰がありヒットラー　笑々
男の子一錢やればもう見えず　笑鬼
時の人記者のカメラへ素直なり　進一路
外交は上手酒豪の時の人　祥月
防諜を母に教へる女の子　鐵花人
錢湯の話題週報の知識なり　嘉夫
週報の通り教はる隣組　大鳥
週報を丸めて定期券の人　同
色紙でふくれた女の子の財布　登美也
古着屋にいゝ柄がある春の風　同
人形と赤い財布と女の子　山川兒
一錢を値切るに奥さん意地を張り　同
小遣を殘して歸る女の子　舞吉
帽章をつけた嬉しさ見せに來る　柳人

川雜 竹原支部句會 （廣島縣）

三月二日　於 芳泉居

梶川芳郎報

その仕草親の無い子とうなづかせ　愛鳩
旅行先知つてゐるのは秘書ばかり　同
待人が代人となりやつて來る　斗秀
待人をあきらめさせる發車ベル　芳泉

三月十五日

出勤の父と出て行く幼稚園　みづほ
出勤の社長待つてるダットサン　芳泉
社長出勤へストーブの陣が解け　芳郎
二合五勺今日から皆んな盛り切り　同
トランクは米と赤帽心得る　みづほ
婚約の嬉しい春のピクニック　紫蓮
近所まで來たことにする許婚　芳泉
奥様のお久し振りの永いこと　愛鳩

川雜 下關支部句會 （下關）

三月十一日　於 市多樓居

國弘半休報

高島田たゞ叔母様の用事だけ　九呂平
氣に入つた髪へつりだけ置いて行き　双龍
厚化粧四十に近き女事務　魚桃
日曜は約束がある女事務　秋史
監督の苦手は何時も女事務　みつる
事務的な態度で接す女事務　柳月

化粧品ならべて淋し女事務　正晴
うちのママ話せないわと女事務　秋史
急ぐから乘つた自動車また止り　光輝
木炭車坂をあえいで上つてる　あきら
バスまでは母が荷物を持つて行き　山彦
ハイヤーを呼んで數へる頭數　秋史
自動車で追ふ腹がありうろたへず　半休
自動車へ無理にたのんでぶら下り　市多樓
留守番が回覽板を書きうつし　半休
回覽板女房が廻し子が廻し　市多樓
お喋りへ回覽板の手間がとれ　同
回覽板噂が先にとゞいてゐ　同
回覽板妻へも一度讀ませとき　半休
手品師の鳩を飛ばせて幕にする　秋史
手品もう客をだました手をひろげ　市多樓
世帶主別な雅號で尋ねられ　半休
代用食妻の心になつて喰ひ　市多樓
切符制猫をどうして捨てやうか　同

車中小集（西日本鐵道川柳大會の關連）

車内から見る線工は上を向き　草雲子
帽子はあみだ嘘を平氣で言ふ男　市多樓
車内と言ふ事を忘れた話し聲　同
春は無帽見上げる空に二機三機　伯峯
そのうちに白狀すると笑つとき　秋史
三十を越した帽子の色を選り　久米雄

川雜　**天王寺支部句會**　（大阪）

三月十二日　妹尾八九滿報

不孝者飛んで出たきりそれつきり　富士
不孝者又母親を泣かせに來　巨人
不孝者どうにか喰べてゐるらしい　双葉
寒さから歸れば湯氣の立つ御膳　巨人
朝のもの揃へてやつて母はねる　双葉
念佛の母に嬉しき朝の水　鮎美
遠く居て母の寫眞を引き伸ばし　豆秋
母の下駄揃へて嬉し本願寺　八九滿
家中が貰ひ風呂する隣組　一實
隣組痲疹の藥分け合うて　豆秋
こゝをこうしなはれと云ふ隣組　美奈子
隣組何時も番茶ですまして居　山人
二三人風を引いてる隣組　かほる
隣組巡査も來てる佳い日なり　白峯
隣組安心させて旅へ出し　八九滿
隣組ハッキリ言へて仲が良い　双葉
寄宿舍へ速達でくる佳い話し　白峯
無口者同志寄宿の窓にゐる　同
寄宿舍へ長い手紙が來る日なり　八九滿
ポケットマネーもう月末を告げてゐる　翠芳
月末を動物園に逃避する　双虎
月末はきつちり取りにくるばかり　双葉
月末に小使室でことはられ　鮎美
月の末醫學博士の請求書　白峯
めざし三四月末の賄　巨人
月末の赤字へみんな叱りつけ　富士
月末は二階で遊ぶ子供たち　豆秋
底力出す程もない相手なり　南風
底力出せば鼻緒がプツと切れ　双葉
體力のテストへ出した底力　富士
底力兄弟子があてはげまされ　かほる

川雜　**鶴町支部句會**　（大阪）

二月十六日　於ライト居　加藤ライト報

正直な理博極樂など信じ　爲夫
迷信を笑うて父は寢てしまい　富士
迷信を笑ふ男がやせてゐる　八九滿
人形を抱かせ友引出すときめ　ライト
親類が許さぬ戀にしてしまひ　滿壽於
お蜜柑も二ッに割つて許嫁　博行
疲勞した顏も出來ない初年兵　小波
疲勞した身に有難き母のこえ　八九滿
陣中の疲勞へ母の夢を見る　富士
夕刊の活字へ疲勞感じて居　双虎

川雜　**鐵道病院支部句會**　於派出診療所醫局

三月四日　北川春巢報

台所鼠かゝつた音と聞き　月照
台所も舊家としての光りやう　柳太
台所の母を無口な兒が見つめ　萬的
台所代用食のメモも張り　紅多呂
吉日の庭は眞白く霜が降り　嘘川
吉日の髮には特に念が入り　鴻了
吉日を嬉しく醉うて戻つて來　紫香
吉日に隱しおほせぬ顏の色　幽香
休む日が續き吉日迫りたり　水虹
吉日を決めて仲人少し醉ひ　苦樂公
花嫁になる日冷たい手をあぶり　水容
吉日の紅は他人が塗つてくれ　春巢
吉日を明日に控へた金屛風　柳太
吉日に出逢ふ同んなじ紋所　某人
軍服も凛々し星無し二等兵　理公
もう一度山振り返り見る門出　久枝
門出の靴きつちり母に揃へられ　同
襖さつと門出の人へあけられる　某人
梅が香へ姫路の城はにほひ立ち　紫津
梅林を二人マスクのまゝ歩き　春巢

川雜　**今治支部句會**　（今治）

三月十二日　於伊豫貯蓄銀行　長野文庫報

上陸の水兵帽へ春の風　心府
水兵の襟に風ある立話　宵明
水兵のまつすぐに行くぜんざい屋　同

軍艦の名が水兵の所書　鬼外
合服に着替へ心も身も輕く　心府
合服は國防色に押され氣味　文庫
合服の輕さいつしか歩きすぎ　向上庵
口答試問譽の家の子と分り　鬼外
こんな事位と試驗官思ひ　文庫
試驗場只監督の靴の音　桃江
春の草學期試驗の間に伸びる　若蘭
試驗パス天下をとつた氣持なり　四郎

川雜 岡山支部句會（岡山）

三月八日　於禁酒會館　鈴木九坡報

一本の植木へ間借春を知り　九坡
不似合な火鉢へ間借獨り居る　三昧
お風呂屋も近く間借の荷をほどき　久米雄
空間地利用間借りを羨ませ　紫翠
白酒へとろりと春がとけてゐる　はの字
白酒のうまさは皿をなめ終り　灯竿
白酒へぼんぼりの灯が搖れやまず　洋子
癖のある球憎らしくネット越し　眞理子
新藥のあちらピンポンらしい音　久米雄
モンペイの慰問ピンポン台をふき　耕水
若い聲ピンポン台へ撥ね返り　九坡
白い球ゲームセットへ轉んで居　ユリヱ
失策の球へバットを撫でゝ見る　灯竿
家計簿に秘密もなくて夫婦老い　紫翠
家計簿へ子供の出來た字が並び　風來子
脫みましたと女中部屋でもめ　同
脫みつこ母の方から笑ろてやり　眞理子
急用へ踏切番が脫まれる　九坡
車掌さんに脫まれてから席をつめ　ユリヱ
カフエーを横目で脫み軍歌行く　鷄城
脫まれてゐるのが今日も遲れて來　灯竿

川雜 四ツ橋支部句會（大阪）

三月十二日　中內翠芳報

鶴峰一周忌

ありし日の君の寫眞にある笑ひ　白峰
父の漫談に子供よく笑ひ　秀甫
藥取り小使錢で賴んでゐ　朗舟
藥取り取り一度位ひと休んで見　德磨
水藥だいじに持つて子は歸り　綠雨
病床を案じて歸る藥取り　富士
藥取り歸らぬ內にお燈明　山月
墓參り勇士の妻がうやまはれ　白扇
墓參して冷たからうと雪を除け　防風
墓參り一周忌とは夢のやう　山月
墓參り夜行の疲れまだ癒えず　輝翠
墓參り手向の花に氣をつかひ　青雲
公園のベンチ子守で占めてゐる　正雄
公園をほめて團體通つて居　山人
公園で子にひかされた樣に云ひ　德磨
公園で故郷の人にフト出逢ひ　茶目坊
公園の日南でどれも子煩惱　榮峯
公園で乳母にも別な連が出來　靜月
公園で逢うてはならぬ人に逢ひ　靜峰
公園のベンチが足らぬよい日和　美奈子
團體の挨公園通り拔け　巨人
公園の月にも倦いた流浪の身　翠芳
公園で語りつくせぬ二人連　糸柳
公園に春が來た〳〵手をつなぎ　八九滿

川雜 堺支部句會（堺）

三月十九日　於角堂居　村上角堂報

鐵兜指揮刀持つは長者の兒　角堂
肩揚げの上のおいづるあぶなげな　同
水筒をからにしてから汗を出し　寅太
水筒はもう一口で飮めるだけ　喜堂
鏡台の橫に人形のケース置き　同
水筒の酒で一行元氣づき　靈舍
肩揚を取れと言はれて顏を染め　同
なけなしの肩揚げつけて二十過ぎ　貴志子
鐵兜脫げば宗派の生き佛　同
まだ敵に會へず兜が背なでゆれ　銃人
泥んこで今日も無事なり鐵兜　同
肩揚げのちんと座つて手を重ね　かほる
肩揚げを踏切番に引張られ　同
いひまけて又鏡台へむきなをり　馥乃

川雜 尼崎支部句會（尼崎）

一月二十三日　於快光莊　飯尾寄興史報

粕汁へバンドの穴を入れかへる　和郎
醫譜へ好きな粕汁ゆげを立て　綠翠
粕汁を一たんおいて洟をかみ　美知夫
粕汁へ今日の寒さを語り合ひ　同
粕汁に二日醉とは申し兼ね　柳千
國寶へガイドと別ないわれ聞く　美知夫
國寶になるとガイドは聲を張り　同
國寶へあとがつかへた列となり　同
國寶があり寺の名を覺へ　八櫻
國寶の軸へ眼鏡の挨ふく　柳千
結ひ立ての頭が下る通用門　美知夫
勸誘がすご〳〵歸る通用門　同
雨露で餘命をつなぐ屋根の草　正路
屋根裏に住んで世間がちと分り　加久榮
はけるだけはかす靴下母は縫ひ　綠翠
女事務靴下代に追はれ勝　美知夫

美知夫君全快祝（一月三十一日）

兄妹の顏が揃うた內祝　八櫻
義理堅い人にもろうた內祝　寄興史
內祝これで病氣と別れる日　加久榮

雜川 早鐘會（大牟田）

三月二十二日　高田抱逸報

内祝病氣になつた日を數へ　和郎
小賣屋で揃ひかねてる内祝　正路
口紅にちと横巾の廣い顔　櫻花

重役のすゝめ緣談斷れず　藤樓
緣談へ親がのりきになつてゐる　路村
緣談へタイピストだのにあの理想　天秀
仲人の趣味が兩家の緣となり　敏一路
緣談を樂しく秘めて夜業する　一秋
上京の母緣談を持つてくる　十四之
親程に氣苦勞をせぬ子の考査　秀湖
一生を賭して考査のペンをとり　進

試驗官父兄の趣味も聞いて置き　梅春
緣談へ課長すゝんで仲に立ち　一葉
緣談を持つて來たよな伯父の顔　平人
緣談の素性へ母は難をつけ　秀湖
緣談を待つ娘が店へ派手にゐる　抱逸
見合とは知らず歌舞伎へ誘はれる　同

分家する話へ緣談承知する　末俊
高すぎる理想を持つて緣遠く　初舟
斷るに惜しい緣談早やすぎる　龜水
緣談が降つてきそうもない四十　五平
緣談へ母は手をかへ品をかへ　巳與吉
當てられし友に緣談すゝめられ　春千代
緣談は我事ながらきめられず　迂咄

阪大川柳會（大阪）

丸島利生報

宿直醫少し自信もついたやう　筑川
宿直が風邪引き直すお水取　たけを
臨月は近し宿直又當り　同
萬年宿直すき燒がほしくなり　春巢
宿直へラヂオ靜かに寢よと云ふ　同
宿直の讀みたい本を積み重ね　同

宿直へ暗號電報手間がとれ　利生
宿直で濟まして哭れる母とゐる　方正
宿直の昔を笑ふ老夫婦　柳秀
宿直は王手のまんま電話口　利生
鼻風邪は藥價にかへる酒を飲み　柳秀
科學日本の天氣豫報へ傘を持ち　春巢
隣組お年齡が知れて笑ひ合ひ　たけを
下宿屋のそのまゝ愛の巢とはなり　栞
よごされた顏もたいした顏でなし　利生
收入を云へば出來ない嫁の世話　方正
怪談のそれから猫がこわくなり　春巢
怪談をすれば妓が寄つてくる　方正
怪談の嘘へ子供がとりまいて　たけを
心中の室への廊下きしむなり　栞
怪談の歸りショボ〳〵降つて來る　利生
怪談に隣の子供去にそびれ　一彌
怪談へうちの障子の破れやう　路郎
怪談へいよ〳〵雨がふりしきり　同

松坂倶樂部句會（大阪）

三月二日　石井白面人報

遺言のつもり隨筆書き續け　生々庵
隨筆が外交秘話に一寸ふれ　同
隨筆のつもりうつかり角が立ち　同
一週忌遺稿とう〳〵間に合はず　普天
隨筆で見る程鋭い人でなし　同
隨筆で讀めば貧乏苦にならず　白面人
妾宅で書く隨筆と知らずして　同
浪人をして隨筆を書きはじめ　同
何時の間に書くか隨筆集を出し　同
隨筆の中でちよつびり懺悔もし　孤篷
大臣の風邪が議會をいらだたせ　生々庵
病理學風邪にも定義つけてゐる　同
風邪の床へ小切手の判とりに來る　普天
眞夜中の往診只の風邪でした　孤篷

風邪と云ふ寧寢を母は亦のぞき　同
風邪風邪と虚弱兒童の出席簿　同
風邪を引き呑む友達がうらめしい　日出夫
風邪いへて春光まばゆき窓硝子　恒明
風邪で寢て家庭も用事の多いとこ　白面人
ポスターの櫻は白のまゝでよし　孤篷
帽章になると櫻もいかめしく　同
理科の朝櫻一枝折つてをり　同
戰盲の頰にやさしく散る櫻　日出夫
滿開を見ても居られぬ花見茶屋　恒明
落花粉々誂らへむきに鐘が鳴り　白面人
落第を他處に櫻が咲き亂れ　同
模擬飛行櫻散らして落ちてゆく　路郎

有恒川柳會（大阪）

寺井銳々報

病みあがりせめて櫛でもつかひたい　至蠻瑠
時局型櫛抽出しへほり込まれ　五月男
散髮屋櫛の合ひ間に政治論　杜丹
櫛工場までも外貨を見逃がさず　青美
いつの間や櫛目の疎い齡となり　同
劍道の眼で髮をわけてゐる　同
丸刈を忘れて櫛を持つた朝　同
くつきりと櫛の齒目だつ若夫人　五遊
湯上りに櫛をくはへたよいポーズ　波夢造
投げつけた櫛はもちろんセルロイド　銳々
一本も無駄な毛がなく櫛を當て　同
足元は人絹ですね銀狐　至蠻瑠
お叩頭して足元を見る女將の目　紫葉
タップダンスチラリともせぬ二千の眼　五月男
足元の明るい内に轉業し　同
足元がふら付く程は酒が出ず　杜丹
足元もおぼろ花嫁手を引かれ　青美
大丈夫かと問へば足踏して見せる　波夢造
せゝらぎに足あらはせて京思ふ　同
足元の覺束なさが親嬉し　銳々

柳界展望

催

▼本社句會(四月五日夜)松坂倶樂部川柳講座(六日、二十日)住友親友會川柳會(十一日)川雜尼崎支部句會(二十日夜)有恒倶樂部川柳講座(十日、廿四日)阪大川柳會(十九日)▼川柳雜誌社堺支部では四月十九日午後七時角堂居に於て三月例會開催以上何れも路郎主幹出席

消息

▼奥村丹路氏(不朽洞會員)は近く句集「手のひら」を刊行されるため目下編纂中である。限定版なので購讀希望の方は今から豫約されたい。申込みは川柳雜誌社宛のこと。
▼小川靜觀堂氏(姫路)は四月八日來阪、本社を訪問された。
▼多田市多樓氏(不朽洞會員)は四月九日萩市松陰神社へ參拜。
▼石曾根民郎氏(不朽洞會員)は三月三十一日橋本綠雨氏夫妻と淺間で久闊をあたゝめられた。
▼大西八歩氏(不朽洞會員)は四月七日夜松江やよい亭に於て山川兒、可明の兩氏と快談。

五★月★句★會

★五月三日(土)午後六時
★御津八幡宮
★兼題「ゴー・ストップ」「青春」
★柳話「新しいと云ふこと」

主催　川柳雜誌社

▼濱田久米雄氏(不朽洞會員)大森風來子(不朽洞會員)石原伯峯(不朽洞會員)の諸氏は四月十三日三浦秋無草氏の送別句會へ出席、翌十四日は田中金十氏別邸にて他の柳友諸氏と歡談。
▼森東魚氏(北京)は四月十日社用で青島へ出張。
▼掛飛吉宣氏(東京)は四月中旬前大藏大臣青木一男氏の生立ちをテーマとした映畫製作のため信州へ出張された。
▼日露戰役に出征名譽の負傷をされた村上冉堂氏(堺)は足の不自由なのを意とせず目下大日本義勇軍のため盡瘁されてゐる。
▼和田獸然人氏(北京)は四月八日濤明氏を囲んで東魚・青龍刀雨明の諸氏と快談された。
▼大井正夫氏は四月十七日礦物の街東邊道通化の街を訪はれ、青香・章の諸氏と歡談。「外相は獨訪祖國は櫻咲き」の句を寄せられた。
▼小林文月氏(尼崎)は長男敏夫君が大高から阪大精密工學に入學、長女葉子孃が尼崎高女五年に進級、次男辰夫君が北野中學に入學されたので親心のよろこびを滿喫されてゐる。
▼平川久枝さん(廣島縣松永)は家事都合で永年勤務の大阪鐵道病院を辭職歸郷された。
▼三谷風月氏(大阪)は〇月〇日應召、川雜代表として潮花氏外多數の柳友に送られて出發された。
▼金政細泉氏(大阪)は病氣靜養のため歸國された全快を祈る。
▼鈴木九坡氏(不朽洞會員)は四月十七日商用で來阪された。
▼月原宵明氏(愛媛縣)は四月十五日川雜本社へ來訪された。

慶

▼新聞日本社々長今枝思老山氏(大阪)の愛孃が三月廿五日に華燭の典を擧げられた。

轉居

▼大西洋氏は大阪市西成區千本通五丁目一五後藤亘弘方へ▼平川久枝氏は廣島縣沼隈郡松永町東町村上森次郎方へ▼渡邊鳴童氏は松山市出淵町大阪時事新報松山西販賣所へ▼多田一波氏は大阪市此花區西島町三六へ

★★★★★後記★★★★★

▼松岡外相が空の旅を續けながらも短詩型のものをしきりにものされたことは、その作品がどうであらうと、近ごろうれしいことの一つである。日本人と短詩といふことについて國民のすべてが、再檢討していゝだらう。
▼「言葉の散歩」は丹路居での準備も何もない全くの雜談を亞鈍氏が蒐錄されたものであるが一寸面白いので載せる事にした。
▼「川柳合評火の見櫓」は遠隔の地にある人たちでの輪講ではあるが、一堂に會したやうに巧みに整理されてあるのでうれしい。久米雄氏の勞を多とする。
▼御好評をたまはつた前田五健氏の「狸」が本號で完結した。この狸の緣からであらう。東京の日本昭狸會から案内をもらつたり、いろ〳〵と狸の話も聞かされた。奈良へ宿替をしようかと家内に云つてゐたら、「近ごろはトント家がないそうだす、今大きな家が一軒空いてゐるが、それは御飯を喰べてゐると茶碗が動くんやそうです」と云ふ。「何んでやネ」「狸がゐるのやそうです」「それは愉快だ、借らうか」と云つたが、みんなが每日大阪へ出るとなると電車賃が大變だなアとパチパチと頭の中でソロバンを彈いて見て、一寸中止の形。
▼四月十二日に、依水園のことや、奈良晒の釜のことで、奈良の關信太郎氏邸を訪ね、いろ〳〵とお話を伺つた。釜も拜見させていたゞいた。依水園にゐられた關氏は今、志賀直哉氏がゐられた高畑の家に住んでゐられる
▼戸田孤蓬氏の「川柳世界史」は目下同氏が多忙で續稿を推敲する暇がないので一、二ケ月休載することにした。
▼高鷲亞鈍氏から「川柳仁義」が屆いた。私の立端にも觸れてあるので、私としても何か書きたいとは思つたが、今は沈默しておく。
▼石曾根民郎氏から「篩と齒」といふ原稿が屆いた。「迷信と川柳座談會」の篩と齒に關連したものである。これは次號の豫告。

(路郎生)

大阪電氣局 川柳會創立大會

日時　五月十三日午後六時開會
場所　大阪市電軍人會館階上(霞町電停前松映南側)
兼題「留守宅」二句　永井光太樓選
同「配給」二句　橋本綠雨選
同「防空」二句　岡田某人選
同「記念」二句　大石文久選
……各題呈賞……
講演「秀句を翫味せよ」　麻生路郎先生
同「題未定」　岸本水府先生
會費　金二十錢・鉛筆持參

大阪市四ツ橋市電運輸部
監督係分室

主催　大阪市電氣局川柳會

非特異性全免疫元
オムニコンメット
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
(適應症狀)
淋疾、各種膀胱炎、睾(副)丸炎、關節炎、中耳炎、蓄膿症、其他各科、急性、慢性、炎症性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し顯著に奏効を奏す。
(特長)
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格低廉。
(包裝)
二cc五管入　二cc一〇管入
二cc五〇管入　二cc一〇〇管入
一cc一〇管入　一cc五〇管入
發賣元　株式會社黑田藥品商會　大阪・東京
―文獻贈呈―

★★社關係の人々★★

主幹
麻生路郎

賛助員
池澤樂居
長谷川一徹
大道弘雄
岡本一平
片岡直方
笠原路生
嘉納純一
田中辰二
長崎柳秀
長岡半太郎
長野晴濱
藤村作
藤本卯之助
顕原退藏
淺田末弘巖太郎

客員
鳥山一歩
沖野岩三郎
大島濤明
大谷五花村
亀井晟修
川村花菱
米村あん馬
田村孝之介
谷脇素文
高尾亮雄
生方敏郎
窪田銀波樓
山本雨迷
安川久留美
前田五健
柴谷宰二郎
篠原春雨
蛭子省二
藤里好古
森東魚

不朽洞會員
橋本綠雨
高橋かほる
福田山雨樓
西田紳樂
永田里十九
奥村丹路
岩崎柳路
寺井銳々
大西八歩
高澤一滉
戸田孤蓬
石井白面人
川出美根子
中島生々庵
戸倉普天
小畑自由期
古川風竹
前山北海
古川鷺花麗
岩崎山石
藤井友一郎
米本貴志子
内藤草一郎
三輪晩翠★
北山悟郎
水谷鮎美
姫田夕鐘
村松夢裡
市塲沒食子
吉田水車
妹尾八九滿
須崎豆秋
春元紀太
西いわを
後藤青兒
宮岡白峰
石曾根民郎
中西おさむ
原史風
正本水客
黒川紫香
丸尾潮花
大坂形水
岩橋双虎
岡田某人
岩崎松代
田中雨月
平佐平三
橋本波夢遺
藤岡至藝瑠
增元翠陽
酒井斗風
北川春巢
小林橙舍
尾崎方正
佐竹香附子
押谷たけを
關根山彦
西尾榮
多田一波
櫻川不水
田中風葉
中原銑人
濱田久米雄
好崎申仙
杉原大研子
菊澤小松園
魚住滿潮
岩本雀踊子
清水友帆
松井円坊
石野秀雄
清水史路
清水白柳子
西川愁水
中内翠芳
多田市多樓
濱田賢次
大森宗男
大森風來子
玉井彩泡
鈴木九坡
逸見灯竿
石原伯峯
西川青美
植山九天
夷一笑

支部と幹事

道頓堀支部(大阪)萬よし
函館支部(函館)晨修
梅田支部(大阪)鮎美
簸川支部(島根)綠之助
鳥取支部(鳥取)鐵州
松山支部(松山)赫堂
天王寺支部(大阪)八九滿
鶴町支部(大阪)双虎
御池橋支部(大阪)いわを
松江支部(松江)山川兒
大鐵局支部(大阪)水客
西條支部(愛媛)英賀夫
城南支部(大阪)申仙
今治支部(今治)文庫
川雜光笑會(大阪)里十九
竹原支部(廣島)芳郎
廣島支部(廣島)風來子
豊中支部(豊中)紫香
下關支部(下關)半休
北鮮支部(羅津府)美笑
蒙疆支部(張家口)柳路
上海支部(中華)天作
鐵道病院支部(大阪)春巢
洛支部(大阪)細泉
四ツ橋支部(大阪)翠芳
布哇支部(布哇)魔花麗
堺支部(堺)角堂
岡山支部(岡山)九坡
尼崎支部(尼崎)美知夫
日和佐支部(德島縣)賢次
川雜早鐘會(大牟田)抱逸

募集

第十八卷 第七號課題
五月廿日締切(十句以內)
古本 森東魚選
慰問袋 清水史路選

第十八卷 第八號課題
六月廿日締切(十句以內)
雷 高橋かほる選
水泳 濱田久米雄選

第十八卷 第九號課題
七月廿日締切(十句以內)
狸 前田五健選
小包 吉田水車選

毎號募集(毎月五日締切)
近作柳樽(雜吟廿句)麻生路郎選
川柳塔 麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇(會報)
文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

投稿規定
▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の原紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書(川柳雜誌原稿)と封筒に朱記の事
▲締切は嚴守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

規格判B5號
川柳雜誌 第十八卷 第五號
毎月一回一日發行

定價
一冊 金三〇錢(送料一錢)
半ヶ年・六冊 金一圓八十錢(特輯共)
一ヶ年・十二冊 金三圓六十錢(特輯共)
外國送本には海外郵送料實費の加算を乞ふ
御註文はすべて前金で願ひます。振替(大阪七五〇五〇)又は小爲替を御利用願ひます。御註文は何月號よりと御指示願ひます。轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十六年四月廿五日印刷
昭和十六年五月一日發行

禁無斷轉載 本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

廣告
本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社廣告部へ御一報下さいますやう。

發行所 川柳雜誌社
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地(昭和ビル)
振替(大阪七五〇五〇)
電話土佐堀 三三三三番 八一六三番

印刷人 麻生幸二郎
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地

賣捌書店
(大阪)藏音社 百貨店書籍部 明文堂 朝日ビル書店
其他市内各書店
(東京)東京堂(神戸)米田寶文館(函館)石塚(京都)三宅(名古屋)靜觀堂

ルービヒサア

大日本麦酒株式會社

含有滋味が
もたらす
元氣

愛飲家に
確認さる

髪の美は
げに日本の姿なり

フケ・カユミを止め白髪・若禿を防ぎ明朗な青年美を創る

伊豆椿ポマード

伊豆椿香油本舗

大槻彩芳園

ガラス壜代用
紙容器

金属代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地

二葉屋商店

電話事務所用 天下茶屋 四一〇四番
戎 四三〇二番

菊正宗

株式會社 本嘉納商店

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）　昭和十六年四月廿五日四種郵便物認可・昭和十六年五月一日發行

SENRYU ZASSHI

Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

ニキビとり美顔水

蚤・蚊・南京虫等の毒虫でカユい時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

▼ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の薬です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！　ゼヒお勧したい薬です！

▲定價一瓶四十五錢・六十五錢・一圓三十錢。全國藥店にあり

ニキビ・吹出物に　是非此藥

東京・大阪

桃谷順天館

錢壹料送　錢〇三金價定（停）　誌雜柳川　NO・208